ONE PIECEの世界に転生

鷹の爪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＯＮＥ　ＰＩＥＣＥの世界に転生

【Ｎコード】
Ｎ１４３６Ｚ

【作者名】
鷹の爪

【あらすじ】
主人公の翼（つばさ）は、
ある日、自分の書こうとしていた二次小説の主人公に転生（憑依）する。
原作に大幅な介入はしません。
作者は初心者なので過度な期待をしないで下さい。

転生？

「あーぁ　今日も疲れたなぁー。」

ガチャッ

「ただいま。」

「お帰り。」

台所から母さんの声がする。

俺の名前は翼（つばさ）　高校3年生だ。
俺はこの物語の主人公なんだ。

「とか現実逃避してる場合じゃねぇんだよなぁ、
受験勉強しなきゃいけねーんだった。」

「ふぅー　一段落ついたし休憩すっかな」

俺はベッドに散らばった漫画『ＯＮＥＰＩＥＣＥ（ワンピース）』を適当に手に取り読み出した。

「やっぱロブ・ルッチつえぇな。」

「ホントおもしれぇよな。」

いいよなぁ行ってみてぇよワンピースの世界。

「月歩（ゲッポウ）」とか「トリトリの実」の能力使ってノリノリで空とか飛び

てぇなぁ。

突然だが俺は今、二次ファンでワンピースの小説を書こうとしている。

あらすじはこんな感じ。
物語の主人公、ウィンは「トリトリの実」モデル“鷹(ホーク)?”を食った鳥人間。
ウィンはサイファーポールNo.(ナンバーナイン)9に入っていたが、ある時脱け出しお尋ね者になる。
そして海賊になるという話。

「六式(ろくしき)」が使えて「トリトリの実」を食っているという。
見ての通り俺の夢を詰め込んだ感じの話だ。
あらすじ的なものは思いついたけど、
それから先が思いつかないんだよなぁ。
この後どうすっかな・・・・・・・・・

「寝るか。」

そして俺はベッドに寝っころがり眠りについた。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

夢の中

抽選会場のようだ。

ガラ　ガラ　ガラ　　ポロ

「おめでとう御座います。

抽選結果は翼さんに決まりました。
貴方は常識的に考えたら普通は叶わない様な夢を一つ叶える権利を得ました。
どうぞ有効にお使い下さい。」
俺は気付いた時にはこう答えていた。
「じゃあ、ウィンになってみたい。」
「かしこまりました。」

乗った船は・・・

目が覚めると俺は知らない場所にいた。
少し揺れているから地震かと思ったら船の上のようだ。
それともう一つ俺の体はボロボロだった。

ガタン！！

後ろから人影。

「ん！？」

どすっ！！

「うっ！！」

しまった首に手刀を入れらｒ

・・・・ばたッ

「・・・」

その男は無言でウィンを運んで行った。

数年後

え？早い？んなこと言ったら漫画だってそうだろうよ。
まァ何があったかは、お楽しみで。

俺は今、“偉大なる航路（グランドライン）航海？を航海している。と言うか迷子だ。
因みにもうどこまで行ってるのか知らないが原作は開始している。
まァだからこうやって海に出たんだけども。
あっ重要な事を忘れてた、俺は今女だ。
目が覚めたら女になってた。
でもそのおかげで追われずに済んでいる。
名前もウィンから前世？の名前、ツバサに変えた。

「で、どうするかな？」

この状況。

「ん？なんだ！急に暗く」

ガゴンっ！！！

「うわァデカい船？潰される！！」

バキっ！！！

「うわァー！！」

海賊船の上に、この船の船長と思われる男が1人。

「フェッ　フェッ　フェッ。」

ガゴンっ！！！

「ん？」

バキっ！！！

「何だ？」

「うわァー！！」

「人の悲鳴？おまえ見てこい。」

「ウオ！！まかせとけ！！」

ザバーン！！

そう答えた魚人の男は海に跳び込んだ。

「ん、此処は？」

「フェッ　フェッ　フェッ　目覚めたか？
此処はフォクシー海賊団の船の上だ。」

「あんた誰？」

「おれの名はフォクシー！！この船の船長だ。」

「俺はツバサ、助けてくれてありがとう。」

「礼はいらねェ、お前おれの仲間にならねェｋ「いやだ。」

ずー　・・ん

「・・・・・・そんなに即答しなくても・・・」

「オヤビーン!!海賊船だ!!」

「ホントか!?　フェッ　フェッ　フェッ。」

そうするとフォクシーは出ていった。

「まさかフォクシーにお世話になるとは・・」

しばらくして

ドン　ドォーン!!

「始まったか。」

ツバサは窓から様子を確認する。

“キバガエル海賊団?? と言うことはこの後ルフィ達と戦うんじゃ・・・

「よっしゃー!!ラッキー!!!」

ガチャ

「お前見にいかないのか？試合始まるぞ。」

「おお、見に行く！！」

がや　がや　わー

「ホントにお祭り騒ぎだな。」

「おい其処の兄（にい）ちゃん、焼きそば食わねぇか？」

「食べる食べる！！幾ら？」

言ってなかったけど服装は男物でさらし巻いている。

試合終了後

「フェッ　フェッ　フェッ、今回も楽勝だったな。」

「いやん　オヤビンかっこよかったですよ。」

「そうか？フェッ　フェッ　フェッ、ん？」

あ、気付かれた。

「よォ、考え直してくれt「全然。」

ずー・・ん

「・・・・・また即答・・・」

「オヤビン！！コラお前っオヤビンは傷つきやすいんだ！！」

フォクシーのことを宥めながら怒ってくるポルチェ。

「ぷぷぷっ！！ぷぷぷぷ！！」

口を押さえて笑うハンバーグ。

何時ものことなんだな。

ん！？

「あっあれ。」

ツバサの指指す先には・・・

「おお、海賊船じゃねェか。」

しかも麦わら海賊団の・・・

「フェッ　フェッ　フェッ、今日はゲーム三昧だな。」

デービーバックファイト　麦わらの一味

ドン　ドォーン！！

「ゲームを」

ウオォォオオ！！！

「受諾した～～～ァ！！！」

あ、始まった。

「見に行くか。」

「さーて野郎共っ！！騒いじゃいやん！！！」

わー　わー

「“敗戦における3か条？を今から宣誓するわよ！！」

長いので以下省略。

一回戦「ドーナツレース」

「レディ～～～イ」

パァァ・・ン！！！

「ドーナツ！！！」

ドドドドドォン

うわっ始まったよ、お邪魔攻撃。
相変わらずせこいな。

数十分後

「勝者！！！キューティワゴン号！！！」

「デイビーバックファイト一回戦を制したのは！！！
我らがアイドルポルチェちゃ～～～ん！！！」

やっぱノロノロビームせこいな、
なんか結果分かってても応援しちゃうね。

いやァゾロかっこいい。
「男なら・・・・・・！！！
フンドシ絞めて、勝負を黙って見届けろ！！！」

だって男でも惚れちゃうね。て、いま俺女だった。

「ゲームを制したのはなんと・・・！！！
麦わらのルフィ～～～！！！」

三回戦終了したな？
さて原作介入だァ！！！

「ルールだ、さァ早ェトコ選べ！！！
誰が欲しいんだ！！！」

「海賊旗をくれ！！！」

「待って！！」

「ん？お前誰だ？」

「俺はツバサ、連れてってくれないか！！！」

「いいぞ。」

「うぉアッサリＯＫするのかよ！！」
確かにウソップ正しい。

「何か気に入った。」

「えーっ！！お前、おれの所には入らねェのｋ「うん。」

ずー・・ん

「・・・・・また即答・・・・」

「ぷぷぷ。」

「勝者！！“麦わらの一味？！！！

デービーバックファイトこれにて閉会～～～～！！！」

わぁぁぁぁぁぁぁぁ！！

デービーバックファイト　麦わらの一味（後書き）

こんな入り方です。
すいません。

青キジ登場

「ーやっぱお前ら・・・
今死んどくか。」ドン！！

「！！！？」

俺たちは今海軍本部“大将？青キジと向き合っている。

そうだった、もうエニエスロビー編じゃん。

ブチブチ！！

青キジは近くの草を抜くと、

ガキィ・・ン！！！

「“アイスサーベル？」

能力で氷の剣に変えた。

「命取る気はなかったが・・・」

「・・・・・！！！」

青キジはロビンを切りつけようとするが、
それをゾロが受け止めた。

ギィィ・・ン！！！

「！！！」

ばっ！！「“切肉（スライス）？」

其処へサンジが、

「“シュート？」

蹴りを加えサーベルを手から放させた。

そしてルフィが突っ込んで来る。

「“ゴムゴムの？ォ」

その時サンジとゾロが掴まれ、

！！？「ウ！！！」「ん！！！」

「“銃弾（ブレット）？ォ！！！！」

「冷た！！」

パキ　パキ　パキ・・・腕や足を凍らされてしまった。

「うわ！！」

「ぐあァ！！！」

「おあああああっ！！！！」

これが海軍本部“大将？の力か・・・

やっぱり生で見るとスゲェな。

がばっ！！！

「ロビン！！危ねェぞ逃げろォ！！！」

パキパキ・・

「ロビンちゃん！！！！！」

パキン！！

「・・・・・！！！！」

「うわあああロビ～ン！！！！」

ドンッ！其処には凍らされたロビンが・・・

「お前ェ～っ！！！！！」

「わめくな・・・ちゃんと解凍すりゃまだ生きてる。

ただし・・・体は割れ易くなってるんで気をつけろ、割れりゃ死ぬ。

」

「例えばこういう風に砕いちまうと・・・・」すぅ・・・

そう言いながら青キジは拳をふりかざす。

「ウゥ！！！やめろ！！！」

「ロビン！！！！」

ブンッ！！！　スカッ

「・・・・・！！！！」

「ハァ・・・あ・・・・・危ねェ！！」

間一髪でルフィがロビンを抱いて避けた。

ザッ・・・「！！」

安心していられるのもつかの間、青キジの足が迫る。

ばっ！！　ぐしゃ！！！
「ぐへ！！！！」
どどど「ギャーギャー！！」どどどど
間一髪で今度はウソップが抱き抱えて逃げ、代わりにルフィが踏まれた。
「・・・・！！」

「ウソップ！！！チョッパー！！！
そのまま船に走れ！！！
手当てしてロビンを助けろ！！！」

「「わ！！わかった」」

「行くぞ！！」

「待って！！」

「何だよ今急いでるｎ　　！？」
「俺に乗れ！！」
其処には鷹がいた。

「お前、能力者だったのか！？」

「そんな事はどうでもいい、早く乗れ！！」

「お！！おうっ！！！」

「お陰さまで・・・・・・
だいぶいいわ・・・ありがとう船医さん」

「そんな・・・嬉しくねーぞコノヤロー」

「嬉しそうだな。
そういやァロビン、ツバサが此処まで運んでくれたんだぜ。」

「そうだったの、ありがとうツバサさん。」

「そうだったのかァ！！」

「そういやァルフィ、コイツ能力者だったんだぜ！！
“トリトリの実の？鳥人間！！」

「そうだったのか！！すんげェ！！！！」

「まあね。」

「ロビンちゃん、何か・・・体のあったまるもん作ろうか！！
食欲はあるか？」

「・・・・じゃあ
コーヒーを頂ける？」

「喜んで～
ツバサちゃんもなんか食べるか？」

流石だな、サンジ俺のこと女だって気付いてるよ。

「別にいいよ。」

「ん？珍しいな、お前がナミとロビン以外にサービスするの。」

「うるせェマリモ、レディにはサービスするのが礼儀だ。」

「「「「え？えええええ！？」」」」

「「「「女だったのか！！！！」」」」

「うん。」

「みんな気がつかなかったのか？」

「「「「全然」」」」

「チョッパーも気付いてたの？」

「うんにおいで。」

バシャ　バシャ　バシャ

「・・・・・んん？？」

「何だありゃ・・・」

ゾロが何か見付けたみたいだ。

「ん？」

「カエルだ！！巨大カエルだ・・・！！！」

青キジ登場（後書き）

丸写しみたいになってしまった。
介入するの難しい。
しばらくこんなの続くかも。

キャラクター紹介（前書き）

１日で３０００ＰＶ驚きです

キャラクター紹介

翼（つばさ）
身長１６９ｃｍ
この物語の主人公。
自分の書こうとしていた小説の世界の主人公になってしまった。
原作知識はエニエスロビーまで。

ウィン（男）
身長１８６ｃｍ

ツバサ（女）
身長１７２ｃｍ

主人公の書こうとしていた小説の主人公。
元ＣＰ９の「六式（ろくしき）」使いで、
「トリトリの実」モデル“鷹（ホーク）？”を食べた鳥人間。
ＣＰ９から脱け出し逃走していた。
命からがら逃げて乗った船で気を失ってしまう。
目が覚め起きて見ると自分は女になっていた。
それを逆手にとり名前をウィンからツバサに変え生活する。

“水の都？ウォーターセブン

「カエルだ！！！巨大カエルだ・・・・！！！」
「クロールで海を渡ってるぞ！！！」
「あんなに急いでどこ行くんだ！！？」
「追うぞ野郎共！！！」

カエルが向かって行ったのは、
「ん？あれは・・・灯台・・・・！？」

シフト駅（ステーション）

建物から女の子が出て来た。
「あ！！
大変だ！！ばーちゃんばーちゃん海賊だよ！！！」

今度はおばあさんとウサギ？が出て来た。
「何！！？本当かチムニー！！！
よーひちょっと待ってりゃ。」

おばあさんは電伝虫を持って来た。
「あー・・・！！もひもひ！！？
え～～と！！・・・・・・！！何らっけ！？
忘れまひた！！！ウィ～～ッ！！」

「「酔っぱらいかよっ！！！」」

酔っぱらいのおばあさんココロさんの話によると此処は海列車のシフト駅（ステーション）で、
ココロさんはここの駅長をしてるらしい。
この先にあるウォーターセブンには世界最高の船大工達がいるらしい。

「・・・よーし決めた！！！
そこ行って必ず“船大工？を仲間にするぞ！！！」どん！！

「ほいじゃあコレな！！
簡単な島の地図と“紹介状？」

「じゃ行くわ！
色々教えてくれてありがとうココロさん、チムニー！！」

ルフィ達は、新たな仲間を引き込むべく、
“水の都？ウォーターセブンを目指す。

「おいアレじゃねェのか？」
「島だ～っ！！！島が見えたぞ～っ！！！」

「うお！！」
「素敵。」
「うおお～っ！！！」

どーん！！

「何だこりゃ～！！！でっっっけ～噴水だ！！！」
はーーーっ！！

「うは～！！こりゃすげー。
まさに産業都市！！」

「港はどこかしら・・・・・・。」

「あ、俺知ってるよ。」

「ツバサ知ってるの！？」

「「「「なら早く言えよ！！！」」」」

「悪い悪い。
あ、俺ら海賊だから裏町の岬のほうがいいかも。」

「ありがとう助かったわ。
ツバサは此処に来た事があるの？」

「うん、てか住んでた。」

「へぇー。」

あ、言い忘れてたけど、この体の記憶はあるよ。
それと翼(おれ)自身の持ってる原作知識はエニエスロビー編までしかない。
その後はあまり知らない。

「「よし！！ほんじゃ行ってきます！！」」
ぴぅ！！

「待ってルフィ！！ウソップ！！
あんた達私についてきてよっ！！」

「どこに？」

「ーまずはココロさんの紹介状を持って“アイスバーグ？という人を探すの、
ツバサも来てくれる？」

「ん？いいよ。」

「よし！！じゃあまァとにかく！！行こう“水の都？！！！」どーん！！

「・・・・んん？ここだけ？町への入り口。」

「“貸しブル屋？？何だ？」

じーーーっ！！
急に俺の方を見てくる3人。
「えっ！？俺！？
あっ“貸しブル屋？っていうのは、ブルを貸してくれるとこで、
ブルって言うのは海の馬みたいなもんで、
ここは水路が多いから住人にとっちゃかかせない乗り物なんだ。」
「「「へぇー。」」」
「じゃあ俺達も借りようぜ！！」
「そうね。」
「すいませーん、ブル貸してください！！！」
「いらっしゃいブルだね？何人だい？」
「4人！！」
「4人なら“ヤガラ？2匹でいいね。」
「荷物乗っけるから3匹のほうがいいんじゃねェか？」
「ん？いいよ俺飛ぶから。」
「そっかじゃ2匹で。」

ザザァーッ！！！

「うおう！！よし行けヤガラ！！」

「ニーッ！！」

今俺達は黄金を換金して造船所に着た。

「はっきり言うがお前達の船は、
わしらの腕でももう直せん・・・・・・！！」

「メリー号が直せねェって！！？何でだ！！！」

ん！？あれ？ウソップがいない、フランキー一家かな？

ん？話が一段落着いたようだ。

「ん？」

ルフィが何か気付いたようだ。

「何？」

「軽い・・・」

そういってトランクを持ち上げる

「？　どうして？

冗談やめてよ！！大金が入ってて軽い訳が・・・」

「「ギャ～～～～～ッ！！！」」

「2億Bないっ！！！」

「ウソップもいないよ！！！

フランキー一家の仕業なんじゃ！！！」

「ルフィ急いで探すのよ！！」

「おう！！！」

ダーーーッ！！

「ねェ！！フランキー一家ってアジトはどこ！！？」

ナミはパウリーに聞いた。

「お前らが船停めてるっていう、

“岩場の岬？からずっと北東へ行った海岸にある「フランキーハウ

ス」だ。」

「ありがとう！！！行こうナミ！！」

ざわざわ

「！　人集り・・・・」

「あれウソップじゃない！？」

「え・・・

ウソップ！！！」

人集りの中に倒れていたのはウソップだった。

「ウソップ！！やったのはフランキー一家なの！？

あいつら！！？」

「そうだ・・・俺が弱ェもんで・・・！！！」

「俺、皆に知らせてくる。」

「お願い！！」

バサッ

ツバサは鷹になり飛び立った。

G・M号（ゴーイング・メリー）

「みんなー！！」

G・M号（ゴーイング・メリー）にむかってツバサが走って来る。

「あれれ！？ツバサが帰って来たぞ！！」

「ツバサちゃ～ん何かあったのか～！！？」

「みんな！！大変なんだ！！

ウソップが！！」

水路

ツバサ達はウソップが倒れていた場所にきた。
「あれっ？ウソップがいない！！」
「場所が違ェんじゃねェか？」
「うるせェよマリモ！！」
「いやここのはず！！」
「見て血だ。」
チョッパーが血の跡を発見した。
「勝手に移動したのかも。」
あああああああ「？」
空から何か降ってくる。
「あああああああああ」ガン！！
ボチャン！！
「ルフィ！！？」
「何やってんだてめェ！！」
「あ！！そうだお前ら大変なんだウソップが。」
「知ってるよ！！！来い！！

今そのアジトへ向かう所だ。」

「早く行こう！！」

“水の都？ウォーターセブン（後書き）

感想待ってます

フランキー登場

フランキーハウス前

「ちょっと待ってろよ、ウソップ」

パキパキ！！

「あのフザけた家吹き飛ばして来るからよ・・・・・・！！！」ドン

今俺達は、また返り討ちにされてしまったウソップの仇を取りに来た。

「“パーティーテーブルキックコース？！！！」

ドガガガガ！！

「ギャー！！」

わああぁあああぁああ

「やべェ！！！

ちょっとコイツらまじでヤベェぞ！！！」

「放て砲弾！！！！」

「・・・・“紙絵（カミエ）？（ボソ）」ヒラリ

すぅ・・・ドガーン！！！

「何だ！？当たんねェぞ！！？」

「“残像斬り？！！！」

指銃（シガン）を使うとややこしいからやめておく。

「消えた！！？ぐああ！！」

わぁあぁあああ

俺らの攻撃によりフランキー一家はどんどん蹴散らされていく。

パキ・・パキ・・

「お前ら骨も残らねェと思え。」ドドンッ！！

あの後、ウソップは目を覚ましたけど、

原作通りメリーのことで決闘して一味から抜けた。

裏町の宿屋　屋上

「アイスのおっさんが・・・・・・・!?」
ルフィが聞くと
「ええ撃たれて今意識不明だって・・・・!!」
ナミがそう答えた。
そうかもう暗殺未遂の事件かぁ
「ちょっと行ってみる」
そういうとルフィは乗っていた建物の屋根から飛び降りた。
「待ってルフィ、私も行くから。」
「俺も行くよ。」

1番ドック
「・・・・・・すごい人望・・・・
近づけそうにないわね。」
ズン♪ ズン♪ ズズズン♪
「?」

急に音楽が流れ始めた。

「出たー！！！」

「この島から出ていけー！！」

「しばり首だー！！！」

すごいブーイングの嵐の中、建物の屋根の上に現れたのは、
アロハシャツに海水パンツ一丁の変態。

「そうだ、おれは人呼んでワァオ！！！」

「んーっ！！！フランキーっ！！！！」ドドォーン！！！

「出て来い“麦わらァ？！！！」

「・・・・・・何だあの変態・・・」

「・・・・・・・！

フランキーって・・・言わなかった！！？」

「・・・・・・！！？

あいつが・・・・・・・！！！」

「おい！！！」「ルフィ！！」

ルフィがフランキーに向かって叫ぶ。

「？」

「海水パンツ！！！」

「あン！！？」ギロ・・

ザワ・・・

「おれがルフィだ。」ドン！！！

「お前かァ・・・“麦わらのルフィ？ってのァ。

人の留守中に、えらく大暴れしてくれたじゃないの、お兄ちゃん・・・！！！」ゴオオオオオオ

「ナミ、ルフィが喧嘩始めると思うからここから離れよう。」

「そうね。」

ツバサはナミを乗せてその場を離れた。

「“ストロング右（ライト）？！！！」

ボウン！！！

「！！？」

フランキーのパンチが、

肘から下のちょうど真ん中らへんから外れ、

鎖が伸びて飛んだ。

ドゴン！！！
そのパンチは見事命中し、ルフィを吹き飛ばした。
「何！？」
驚くナミ、それにしてもすごいな“改造人間（サイボーグ）？。
ジャララ・・
伸びたフランキーの腕が戻っていく。ガシン・・
ボコ・・・　どさっ！！
「「ルフィ！！」」
「何今の！！」
「腕が外れてた。」
「・・・・・あァ、知らなかったのかい・・・・お姉ちゃん達。」
右腕を左手で伸ばしながら話す。
「じゃあ教えとこうか・・・・
おれは“改造人間（サイボーグ）？だ！！！」ドン！！

襲撃犯

1番ドック

フランキーとルフィのケンカをしている所に、
ガレーラカンパニーが割り込んで来た。

「くだらねェマネしてくれたな。」

「？」

「身に覚えがあるだろう・・・！？
よくまたここへ顔を出せたもんだ。」
パウリーが聞いてくる。

「・・・・・・・何で？
俺たちおっさんのニュース聞いて・・・・」

「とぼけるんなら・・・・・・
締めあげるまでだっ！！！」ばっ！！
シュルルルルル！！！　「うわっ！！！！」
「R（ロープアクション）・A“ハーフノット？！！！！」
袖から出てきたロープはルフィの首に巻き付いた。
「ウェエッ！！！苦しィ・・・苦・・・・・・・！！！！」

「“エア・ドライブ？！！！！」
投げ飛ばされるルフィ。
「ぶへ！！！」ドゴォン！！

「やっちまえー！！ガレーラカンパニー！！！！」
わぁあああぁああ
「社員最強の５人のケンカだっ！！！！」
わー　わー
「え？？何で？？何で船大工もみんな敵なの！？」
ザザァッ　ドドゥン
「何か誤解されてるのかも。」
ガ　ガ　ガ　ガシャン！！

ボコォン！！
「くそォー！！
何なんだ理由くらい言えェ！！！！」

「理由を知りてェのは俺たちの方だ・・・！！！！」

「昨夜　本社に侵入して、
アイスバーグさんを襲撃した犯人はお前らだろうが！！！！！」

「？　何それ。」

「ばか言え何で俺達がそんな事するんだ！！！」
怒鳴るルフィ。
「“犯人？を二人憶えているとアイスバーグさんが証言したんだ。
政府に聞きゃあお前らの仲間だと言うじゃねェか・・・
“ニコ・ロビン？って賞金首はよ！！！」

「捕まえろォ！！！暗殺者共を逃がすなァ～！！！！」

「やめてよ！！
放してってば、私達が何したっていうのよ」

「とぼけるな、暗殺者の一味め！！！！
よくもアイスバーグさんを撃ちやがったな！！！！
逃がさんぞ！！！！」

「ナミ！！！！」がしっ！！「あっ！！！！」
ツバサはナミを助けようとしたが捕まってしまった。

「くそぉ！！
おい！！やめろお前らァ！！！！
おれ達はなんもしてねェ」

「いつまでも言いはってるがいい。
観念しろ、海賊。」

「ぶっ潰せ！！ガレーラカンパニー！！！！」
わあぁあああ

「いえーい！！
アッハッハッハッハッハ！！」

ちゃぶだいでお茶を飲んでいるのはフランキーだ。

「気分爽快だわいな！」

「そうそうあんな奴ァ吹き飛ばしちまえばいいんだ！！
さすがはおれ達の誇り！！！
“ガレーラカンパニー？！！！！」

「いやいやいや、
しかしお前、その麦わらのチビは、
我がフランキー一家の憎っくき仇でよ！
まずこのケンカの先客はおれだったんだよ！
そこへきてお前ら、
おれの獲物を横取りする様なマネをすんなと・・・・・・・・」

「何度言わすんじゃクラァ～ア！！！！！」
おんどりゃああ！！！！ガシャァーン！！
そう言ってちゃぶだいを投げ飛ばした。

「コネクターセット・・・・・・」ガチッ　ガチッ

「これでさっき巨大クレーンを倒したんだ！！！」

「クレーンを・・・・・・？大砲か？」

「「やっちまえだわいなアニキ～～！！」」

ブオオ・・・！！！「なァに砲弾なんざ飛ばさねェよ
飛んでくのは・・・“空気の弾？
ただし・・・速度は風の領域を越える。」

「空気？」

「危険だ逃げろ～～～～！！！」

ぶくっ！！　ギリ・・ギリ・・

「アァァ～～～～～～～っ！！！」

「“風来砲（クー・ド・ヴァン）？！！！！」

「！！？」

ベ　コ　ォ　ン　！！！

「うああァ～～っ！！！」

吹き飛ばされる職人達。

「痛・・・っ！！！！

何だ！！？

“風圧？に・・・激突されたみてェな・・・！！！ハァ・・・ハァ」

ガラ・・・

「作りかけのガレオンごと・・・！！

1番ドックが崩壊したァ～～～っ！！！！」

「ナミ、ツバサ！！！走れ！！

何とかしてアイスのおっさんとこ行こう！！！」

「おいみろ！！“麦わら？が逃げるぞ！！！」

がし！！「しっかり捕まってろ！！」
ぴょーん

「本気でいくの！？」

「あたり前だアイスのおっさんが、
何でロビンを犯人だと言ったのか直接聞いてくる。」

「慎重に行けよ。俺らは追われる身だ。」

「じゃ行って来る。」ぐいーー・・ん

「え・・・ちょっ・・・・・・・！！！！」

バ　リ　ィ　ン！！！「！！？」
ルフィは窓から突っ込んで行った。

「あのバカ！！！
ナミ、俺様子見て来る！！」

「お願い！！」

バサァ！！！

アイスバーグの寝室

「昨夜　おれはニコ・ロビンをこの目で見た・・・・・・・・！！
彼女はお前の仲間・・・それが事実だ。」

「それは本当にロビンだったのか？」

ガチャ

「誰だ！！？」

「驚かせてすいません。ツバサと言います。」

「海賊小僧の仲間か？」

「はい。」

「何の用だ？」

「貴方を殺そうとしたのは、
俺達じゃありません。」

「そんな事か・・・口を開くな、お前の言葉にゃあ、もう力はない。」カチャ・・・
そう言って銃を構えた。
「貴方を襲ったのは、“ＣＰ９（シーピーナイン）?です。」
「それは噂だろう。“ＣＰ９（シーピーナイン）?なんてものは存在しない。」
「いいえ、噂ではありません。」
「何を根拠に・・・・」
「何故なら俺は・・・・・・元“ＣＰ９（シーピーナイン）?だからです。」
「なんだと！！?」
「何だ?そのＣＰなんたらってのは。」
ルフィが聞いてくる。
「“サイファーポール９（ナイン）?、
“正義?の名の元に政府対して非協力的な「市民」への・・・
「殺し」を許可されている、特別な９つ目の機関。」
「正義と名のつく殺しがあってたまるか！！！」
「奴らはきっと貴方の持っている“設計図?を狙っている。」
「何故それを知っている！！?」
「言ったでしょう俺は元“ＣＰ９（シーピーナイン）?だって。」

「元“ＣＰ９?何だったら誰が犯人なのか分かるんだろう?
それとニコ・ロビンについてはどう言いわけする?」

「それを知って本人達の前で平然としていられますか?
それとロビンについてですがそれは何とも・・・
今、彼女は何処にいるのか、わかんないんです」

「・・・」

「じゃあこれで俺らは行きます。
俺らが出たら壁をその銃で撃ってください。
その方が誤魔化し易いです。
ルフィ行くよ!!!」

カチャ

バサァ

「何の話だったんだ?全く分かんなかった。」

「ゴメン後で話すよ。あ、おーいナミー！！！」

「あんた達話長すぎ。
捕まったんじゃないかと心配したのよ！！！」

「「ゴメン。」」

「みんなを探そう、
何を聞いたかは後で話すよ。」

襲撃犯（後書き）

文才がァ！！！！

作戦開始

『事態はもっと悪化する。
今日限りでもう・・・・・・あなた達と会うことはないわ。』

「・・・・・ロビンは、
確かにそう言ったんだなチョッパー。」
ゾロが聞いた。
「うん。」

「今日限りでもう会う事はねェってんだから、
今日中に何かまた、事態を悪化させるような事を、
するって宣言してる様にも聞こえる。事態を更に悪化させられると
すれば・・・・・・
その方法は一つだ・・・」

「今度こそ“市長暗殺?。」

「事が起こるとすりゃ今夜だ。
“現場?へは?」

「行　く」

「行くのは構わないけど・・・・・・・
問題があるのよね。
サンジくんはロビンが誰かと歩いてるのを見たと言ってたでしょ、
アイスバーグさんも・・同じ証言をしてるの“仮面を被った誰か？
って。
急にロビンを豹変したのはそいつが原因なのよ！！」

「みんなちょっといいか？」

「何？」

「実を言うとおれ・・・・・・
5年前まで政府の人間だったんだ。」

「え！？」

「“サイファーポール？世界に8つの拠点を持つ政府の優れた諜報機関。
俺はその内のあるはずのない9つ目のサイファーポールにいたんだ。
」

「あるはずのない9つ目の・・・」

「アイスのおっさんにも言ってたやつか。」

「5年前、俺達の所へ任務が来た。
ガレーラカンパニーへの潜入調査だ。
アイスバーグさんは“ある物？の設計図を持っていた、それを奪う
ためにだ。
その時、任務のメンバーに指名されたのが・・・・・・おれとルッ

チ、カク、カリファ、ブルーノの5人・・・」
「もしかしてそれがこの事件の犯人？
しかもカクってウソップに似ている奴じゃ・・・」
「アイスのおっさんに教えに行くぞ！！」
「待って！！教えたらアイスバーグさんは確実に殺される、
それに信じて貰えないと思う。」
「ツバサの言う通りだ、ヘタに動かないほうがいい。」
「奴らが動いたらおれ達も動こう。」
「分かった。
じゃあ、行こう。」

本社前の木の上
ビュオオオオオ・・・がさっ
「ちょっと遠いぞ！」
「腕伸ばして飛んでけばいいでしょ！
騒ぎが起こってからね。」

「そうだなこっちが先に騒ぎを起こしちゃ、
それを利用されるだけだ。」

「すごい数の護衛だ・・・（汗）
みんな武器持ってて強そうだぞ！！」
双眼鏡を覗いて様子を見るチョッパー。
「・・・・・・それゃそうでしょ。
海賊だってねじ伏せちゃうのよ、
ここの船大工達は。」

「何か動きがあったら、すぐ教えろよ。
ってツバサ！？お前何服脱いでんだ！？」

「何って、ちょっと見てくるだけだよ？
服着てる鳥なんておかしいだろ？
それにさらし巻いてるからいいじゃん。」
「そういう問題じゃねェ！！！」
「あ、ズボンも脱がないと変かな？」

ぼかっ！！

「痛ェー。」

「あんたは女なんだから、
少しは恥ずかしがりなさい。」
カチャ
「これ着ければ飼われてる鳥に見えるんじゃない？」
そういって俺に首輪を付けてくれた。
「ありがとう。じゃ見てくる！！」

バサッ

ビュウウウウウ

バサッバサッ

さてと・・・アイスバーグさんはどこかな？

ド　ォ　ン　！！！

！？始まったか・・・・

CP9の強さ（前書き）

サブタイ思いつきません。

CP9の強さ

バサッバサッ

「あれっ！？いない！！」

さっきまでルフィ達のいた所へ戻って来ると誰もいなかった。

「先行ったか・・・」

ド　カ　ァ　ン！！！

「ん！？あそこか！？」

窓を覗くとアイスバーグさんとパウリーが倒れていた。
「だいぶ進んじまってんな。突っ込むか・・・」
ビュ！！　ド　カ　ァ　ン！！
「！？」
「ツバサ！？」
「仲間か・・・」
「ロビン！？
何で勝手にいなくなるんだ！！！」
まあ理由は知ってるんだけど
ね・・・・
「・・・あなたまで。
私の願いを叶える為よ！！！
あなた達と一緒にいても決して叶わない願いを！！！
・・・・・・それを成し遂げる為ならば私は、
どんな犠牲もいとわない！！！」
「悪いがそこまでにして貰おう・・・

我々はこれから重要人物を探さなきゃならないんだ、急いでる。
カリファあとどれくらいだ？」

「・・・・あと2分よ」

「突然だが・・・あと2分で、
この屋敷は炎に包まれる事になっている。
・・・君達も焼け死にたくなければ、
速やかに屋敷を出る事だ。
まァもちろん・・・
それができればの話だが。」

ヒュッ！！
ド　ゴ　ォ　ン！！！
「ルフィ！！ゾロ！！！
何なの・・・・・・！？
あいつらの強さ・・・！！！」

ルフィ達は「六式」の前に軽く捻られてしまった。

「・・・・・・環境が違う・・・・・・！！
我々「CP9」は物心ついた頃より、
政府の為に命を使う覚悟と、
“人体の限界？を超える為の訓練を受けてきた・・・・・・・
そして得た力が6つの超人的体技「六式（ろくしき）」。
よく身にしみたハズだ。
世界政府の重要任務を任される我々4人と・・・
たかだか一海賊団のお前達との、

ケタ違いの戦闘力の差が・・・・！！！
最後に・・・
面白いものを見せようか・・・・」

「・・・・・・！？
え・・・・・・・！？？」

「？
うわあああああ！！！」

「“ネコネコの実？・・・・
モデル“豹（レオパルド）？」

「・・・・・・！！
“ヒョウ人間？か・・・・」　「でけェ。」

「ルッチ、職人達が上がってくるわ！」

「・・・なァに来れやしない・・・
「嵐脚」」ビュッ！！

ドゴゴゴゴォーン！！！
斬撃が飛び部屋の壁を斬り裂いた。

「壁から離れろ！！チョッパー！！ナミ！！！」　「わ！！」バキバキ

ダダッ！！　いきなりパウリーがアイスバーグに向かって走り出した。

「あなたを必ずここから連れ出す！！！」
「無理だ、お前そのキズで・・・！！！
どうやって！！」

「おやめなさい、パウリー。」
カリファーが言った。

「ハァー
・・・・・・おれは少なくとも・・・・・・！！
今までお前らを本当に“仲間？だと思ってた！！！」

「・・・・・・お前だけだ・・・・・・」ギラッ
ルッチは左手を構えた
「！！」

「ハトのやつ～～～～！！！」ドカァン！！　「！！」
ルフィはルッチを殴った。が、
「麦わら！！！」
ギラ・・・「「指銃（シガン）」。」
ド　キ　ュ　ン！！ズボッ！！
ルッチの指はルフィの体を貫いた。
「・・・・・・！！！
ウ・・・オ・・・」

「ルフィ！！！」

ガッ！！

「島の外まで・・・・・・飛べ！！！！」
ボ　コ　ォ　ン！！

ルフィは壁をつき抜けて飛んで行った。
「うわぁ～～～～～～～…」

「ルフィ！！！」
「ルフィ～～！！」
ナミが叫ぶ。
「てめェ！！！」　「「鉄塊（テッカイ）」。」
ギ　ィ　ン！！！「！！！」
ゾロが斬りかかるが鉄塊で守られてしまった。
シュッ　ド　ゴ　ォ　ン！！！「ぐハ！！！」
「「ゾロ！！！」」バ　コ　ォ　ン！！！
「お前もだ・・・」
ゾロもまた、屋根をつき抜け飛んで行った。

「おい！！女が一人上階から落ちてきたぞ！！」
そこにはナミが倒れていた。
「こいつは！！！“麦わら?の仲間だ！！」
「間違いねェっ！！！
捕まえて仲間の居場所を吐かせよう。」

職人達は必死の消化作業をしていた。
「ダメだ、風に負けちまう！！」
「全然火が消えねェぞ！！」
「まだ中に誰かいたら・・・！！
これじゃもう助からねェ！！」

その時、

「え！！？」バ　リ　ィ　ン！！！
窓を突き破って何か出てきた。
出てきたのは・・・

ズダン！！

「鳥とトナカイ！！？？」

「アイスバーグさんと・・・・・・！！
パウリーさんを背負ってるぞ！！！」

「ハァ・・・ハァ・・・」ヨロ・・・
（ナミ・・・・・・！！
大変だ・・・治療して・・・やんなきゃ・・・・・・）
フラ・・・「！」ド　サ・・・・・・

「！？」
急いで人型になって近付く。
「チョッ・・・・・」駄目だ俺も体が・・・・・・
ド　サ・・・・・・

「能力者だ！！！」

「す・・・！！！すぐに手当てを」

「すごい火傷だ！！！」

「おい！！コイツらどうする？」

「そいつらもだ！！命の恩人だぞ！！！」

“ロケットマン?出航（前書き）

１５０００ＰＶです！！
ありがとうございます！！

“ロケットマン?出航

『・・・・・・じゃあお前の“願い?ってのは・・・・!!!』

『ー私を除く麦わらの一味の7人が、
無事にこの島を出航する事。』

『その為なら兵器も呼び起こし、
世界がどうなろうと構わねェってのか!!?』

『構わない。』

「おれは引き鉄を引けなかった。
事もあろうに、全世界に生きる全ての人間の命より、
あの女はお前達7人の命を選んだ。」
私達の為・・・!!!

「よかった・・・ロビンはじゃあ・・・
私達を裏切ったんじゃないんだ・・・・・・・!!!」

その後、職人達にも協力してもらって駅に向かうも、
“海列車?は出港した後だった。

しかしルフィとゾロは見つかり、
船を貸して欲しいと船大工達に頼むが断られてしまった。
その時、ココロさんが・・・
「死ぬ覚悟があるんなら・・・
ついてきな、出してやるよ“海列車?。」ドン!!

「さァ海賊共、ふり落とされるんじゃらいよ!!!」
シュッシュッ　シュッシュッ
「ウォーターセブン発エニエス・ロビー行き、
“暴走海列車?「ロケットマン」!!」

「よし!!!出航!!!
行くぞォ!!!全部奪い返しに!!!!!」
ポッポ〜〜!!!

麦わらの一味とガレーラの職長3人とフランキー一家を乗せロケットマンは出航した。

「フランキー一家とも、
ガレーラの船大工達とも、
町じゃゴタゴタあったけど、
この先はここにいる全員の敵は同じだ！！」

このシーンのルフィカッコいいよなァ、
しかもそれを生で見れるなんて・・・
ってんな場合か！！

「ーせっかく同じ方向むいてるもんが、
バラバラに戦っちゃ意味がねェ、
いいか、おれ達は同志だ！！！」
ガシッ！！
「先に出た“海列車？には、
おれ達の仲間も乗り込んでる！！！
戦力はまだ上がる！！！
大波なんかにやられんな！！！
全員目的を果たすんだ！！！
行くぞォ～！！！！」
「「「「「「ウオオオーーーッ！！！！」」」」」」

プルルルル・・・「！」
「ナミ、どうしたの？」
「鳴った、子電伝虫。」

『ナミさんナミさん聞こえるか！？』

「うん！！サンジ君ね！？」「えっ？サンジ？」

『ん？ツバサちゃんもいるのか。

こちら、ちょっとアホ二人のせいで、
マズイ事になってきた。
そっちは随分賑やかだな。』

「高潮（アクア・ラグナ）だよ。」

『なるほど。』

「もしもしサンジ君！！？
ロビンの行動の理由と、
私達の今の状況を全て話すからよく聞いて！！」

ナミはあった事などを全て話した。

「ぷは、面白かった。」

ん、戻って来たか。

「ルフィ！！こっち来て！！」

「ん？」

「サンジ君！！」

『おう、ルフィか！！』

「サンジーっ！！
そっちどうだ！？ロビンは！？」

『ロビンちゃんは、

・・・・・・まだ捕まったままだ。
ナミさんから今事情を聞いたとこさ。
・・・全部聞いた・・・』

「・・・そうか、
いいぞ暴れても!!」

「ルフィ!!無茶いうな!!
おれ達が追いつくまで待たせろ!!
おいコック聞こえるか!!
その列車にはヤベェ奴らが「いいってゾロ!!
お前ならどうした。」「!」
「止めたってムダだ。」

『・・・わかってなァ。
おうマリモ君、
おれを心配してくれんのかい?』「するかバカ（怒）」

『だが残念、
そんなロビンちゃんの気持ちを聞かされちゃあ・・・
たとえ船長命令でも
おれは止まる気はねェんで!!!』ドン!!
バキッ・・・!!!サンジは電伝虫を握り潰した。

“ロケットマン?出航（後書き）

丸写しに近い気が・・・・・！！
感想、質問あれば下さい！！
待ってます！！

“エニエス・ロビー?到着（前書き）

２００００ＰＶ突破ありがとうございます！！

“エニエス・ロビー?到着

「アレが“正義の門?ら・・・・・・・!!!」

俺達はサンジ達とも合流し、
ついに不夜島“エニエス・ロビー?に辿り着いた。
やっと本気出せるぜ。

「連行された罪人を取り返してェなら、
あの門を通過するまでが制限時間(リミット)ってことら!!
ぐずぐずしてるヒマはないよっ!!」

「そんじゃおれ達ァ作戦通り先行する!!!
援護は任せとけ!!」

フランキー一家とガレーラの船大工達が意気込む。

「あれ?ルフィは?」
チョッパーがルフィがいないのに気付いた。
「え?さっきまでここに・・・」

「あれ!!?麦わらさんっ!!?」

「ええ!!?」

フランキー一家の奴らの指す方を見ると、
島を囲む柵の上にルフィがいた。

「何やってんだあいつは勝手にーーっ!!!」

「あの人作戦全然わかってねェ〜〜っ！！！」
「無駄だった」
ナミが肩を落とす。
「『わかった』って言ったよな。」
「5分“待つ？とかムリだから。」
「そりゃそうか。」
「んががが、気の早ェ奴らね。」
「いけー！！海賊兄ちゃん！！」
「遅れをとるなソドム！！ゴモラァ！！！」
「バヒヒヒ〜〜ン！！！」
フランキー一家達も突入して行った。
「さてと、俺達は気長に4分待つとするか。」
「ツバサ、思ったんだけど。」
ナミが思い出したように話しかけてきた。
「何？」
「その服動きにくくない？」
「え？まァ確かに・・・
ん？ナミその手は何？」

ナミが怪しく指を動かしながら近付いてきた。
「決まってるじゃない。」ニコッ
「え？やめ！！うわあああああああ！！！！！」

「ハァ、疲れた。」
着替えさせられましたよ。
露出度の高い服に・・・・・上だけ。
谷間が見えるゥ！！！
下だけは必死に頼んでジーパンにしてもらった。
「ツバサちゃんビュ～ティフォ～！！」
気持ちわるっ！！普通にしてたらカッコいいのにね。
「ヘェーあんたスタイル良かったのね、
いつもあんな男物の服しか着ないから勿体ないわ。
そうだ！！！」
そう言うとナミは俺の服を掴み・・・
「え・・・」ボチャン
「俺の服・・・・・」
捨てた・・・海に・・・

「何してくれとるんじゃァ！！！」

「んなことしてる場合か？」
ゾロが呆れた様子で言ってきた。

「あ、すいません。」
「おれは作戦通り外行ってくる。」
『ーさァ5分たったよ。
ボチボチいこうかね・・・・・・・』
「おいばあさん！！！」
前の方からゾロの声がする。
「ん！？何らい！！
」
『おめェら作戦変更だそうらよ！！
全員車両にしっかりとしがみつけと言ってるよ！！』
「おうアホ剣士！！何かあったか！！？」
「「正門」を閉められた！！」
「何だとォ！！？」
「大変だー門にぶつかるぞー！！！」
「心配無用・・・道はある！！
柵をつっぱれカエル！！！」
「ゲロォ！！！」
ドガシャァン！！！グニャ・・・！！！
曲がった柵に乗り上げ海列車は・・・
「“海列車？が・・・・・！！！」

「飛んだァア〜〜！！！」

「死ぬーーーっ！！」

「ナミさん早くおれの胸の中へ！！！」

「ゾロ、あんた着地の事、

考えてあるんでしょうね！！？」

「任せろ！！！」「ゲロ」「運に。」

「運任せかーー！！！」

「おれ死にたくないから出るわ。じゃ」

がしっ！！

「逃がすか！！！」

鳥になって窓から出ようとすると足を掴まれた。

「前に巨人ーっ！！？ぶつかるーっ！！」

「ウソッあいやそげキングうるせえよ。」

「ツバサひどっ！！てうわあああああ！！！」

ズ　ド　ォ　ン！！！

「どへーーっ！！！」

巨人が唸なり声をあげる。

ロケットマンはもろ巨人にぶつかり落ちた。

「あいたたたた。ん？」

辺りを見回してみるとナミが攻撃の準備をしていた。

「“サンダーボルトテンポ？！！！」

バリバリッ！！ドカァァン！！！
「ぎゃあああああ！！！
ーーーーーって無差別かーっ！！」
ガン！！「いでー！」
「そげキングーー！！！」
ナミが何故かそげキングにつっこんだ。

「うわ、すげー迫力！！」

「てめェナミ！！！何してくれてんだ！！！」
「んナミさん、おれは今君に出会った衝撃を思い出したよ！！」
“サンダーボルトテンポ？はゾロ達にも当たっていたようだ。

「ーところで、先突っ走ってった、
あのアホはどこにいるんだ？」

「さァ、この島も狭くはないから、
探すとなると・・・・・・」
ボカァ・・・ン！！
向こうに見える建物が崩れる。
「「「「「「絶対あそこだ！！！」」」」」」
「それじゃ・・・追いかけるか。」

「待て！！！こっちへ乗れェ！！！」
「バヒヒヒ〜〜〜ン！！！」
フランキー一家の巨大ブル“キングブル？が走って来た。
「助かったーーっ！！」

俺達は“キングブル？に乗りこんだ。

“宣戦布告？（前書き）

ユニーク４０００人突破ありがとうございます！！

“宣戦布告？

『エニエス・ロビー本島全部隊へ！！！！
海賊達が「裁判所」前広場へ到達した！！
全兵直ちに「裁判所」前広場へ！！！！！』

俺達は“キングブル？やパウリー達の活躍で、
ついにルフィのいる「裁判所」の前まで来た。

「“艶美魔（えんびま）？」ユラリ・・・ユラリ・・・
「なんだ！！？刀が曲がって見える。」
「“夜不眠（よねず）？
“鬼（おに）？“斬（ぎ）り？！！！」どん！！
「ぎゃあああ。」

ダッ！！
「さァ行くぞ、道があいた。」
「うん」

「うおおおおおおお！！
待て待て待てェ！！！
そこを退かんかトナカイにバカ剣士！！」
ドヒュン！！！ド　ドド　ドド　ド
「この危険な敵陣！！
ナミさんとツバサちゃんの進む道は、
このおれが切り開くのだ！！！どけい！！！」おらァああ
サンジがゾロに蹴りかかった。
ガキィン！！「うわ！！危ねェてめェやんのかコラ！！！（怒）」

「ええ！！？何でケンカ始めてんだ！！？」

「ナミさん、ツバサちゃんこっちだ！！！
おれにのみついてきな！！！」

「あのね、私達ロビンを助けに来たんでしょ！？」

「おお・・・そうだロビンちゃんが・・・・・・！！
おれの助けを待ってるんだ！！！
今頃寂しくて泣いてやしねェかな。」
ついて来いとか言ってたのに、
先に行っちゃったよあの人。

「ん？あーーーっ！！
目を離したスキにゾロが！！！」

チョッパーの見ている方向を見ると、
ゾロが反対方向にむかい走っていた。

「階段って言ったのに、
どう間違ったらそっち行くのよ！！」

「俺連れ戻しに行くよ。」バサッ

それを見ていたフランキー一家達。
「アニキは助かるんだろうか。」

「やる時ゃやるタイプなのさあいつら。
きっと。」

「もう・・・！！」

「有罪、有罪。」ジャラ・・・

「何なのよ一体こいつら！！！」

俺達の目の前には鎖つきの鉄球を持った“陪審員？”がいた。

「ストーカーじゃない？」
こいつらの格好キモ過ぎ。
トゲ付きのブリーフみたいなの履きやがって。

「有罪！！有罪！！」

「行くわよ！！チョッパー！！ツバサ！！！
間違えた！！行くのよ！！チョッパー。」

「あっおれ一人！！？」

「「私達／俺ら女だもん。」」

「“龍？”」「！！？」「“巻き？！！！！”」

ズ　バ　ァ　ン！！！
「え！！？」
「オォ・・・！！」
いきなり床が崩れ、目の前の“陪審員？が倒れた。

「ちょっとこの床も危ねェ！！！」
「何なの！？下に何かいるの！！？」
「ゾロじゃない？」バサッバサッ
「ズルっ一人だけ飛んでる！！」
「しょうがねェ「生命帰還」解除。
ほら掴まれ！！」
がしっ！！「うわツバサが大きくなった！！」

ボッカァァ・・ン！！

「いやあああ～～」

とんっ！　着地成功。
「あっぶねェー。
おっ！！屋上じゃねェか。」

ガラ・・・「ふう・・・
始めからこうやって登りゃよかった。」
穴の中からゾロが出て来た。

「ゾロ！！やっぱりアンタか！！（怒）」
「おらあああ」ボッコーン！！
サンジも来たようだ。

ヒュルルルルルル・・・
「あれ？
あ！！！そげキング！！！」
「え、空飛んでるっ！！」
「着地大丈夫か？」
ひゅるるる・・・ドカァーン！！
「そげキング～～！！」
これで全員揃ったか。
「頼むからよ！！ロビン・・・・！！！
死ぬとか何とか・・・
何言っても構わねェからよ！！！
そういう事はお前・・・
おれ達のそばで言え！！！！」
「そうだぞロビンちゃん！！！！」
「ロビン帰って来ーい！！！！」
「あとはおれ達に任せろ！！！！」ドドォン！！！
「あの象徴（バッヂ）を見ろ海賊共ォーー！！！！」
スパンダムは自分のいる塔の上にある旗を指差した。
●
I

●ー●ー●　　↑こんな感じ

I

●

「あのマークは四つの海と“偉大なる航路（グランドライン）？にある、
１７０国以上の加盟国の“結束？を示すもの・・・・・・！！！
これが世界だ！！！！
盾突くには、
お前らがどれ程ちっぽけな存在だかわかったか！！！
この女が、
どれ程巨大な組織に追われて来たかわかったかァ！！！」

「ロビンの敵はよくわかった！
そげキング。」

「ん？」

「あの旗、撃ち抜け。」

「了解！！
新兵器巨大パチンコ、名を“カブト？。
その威力とくと見よ！！！
必殺・・・“火の鳥星（ファイアバースター）？」

ボオォウ！！！　ドゥン！！
「！！！？」
そげキングの撃った球は、
火の鳥となり世界政府の旗を撃ち抜いた。

「・・・・・・まさか。」

「あいつら・・・やりやがった・・・・！！」

「海賊達が・・・！！「世界政府」に！！
宣戦布告しやがったァ～～～！！！！！」

「正気か貴様らァ！！！
全世界を敵に回して生きてられると思うなよォ！！！！！」

「望むところだァーーーーーっ！！！！！
ウオォォォォォォオ！！！！」

「ぎゃあああああああ。」
言い返されてビビってるよ。

「ロビン！！！
まだお前の口から聞いてねェ。」

「・・・・・・！？」

「「生きたい」と言えェ！！！！！」

「ロビン！」　「ロビンっ！！！！」

「生ぎたいっ！！！！！
・・・！！！私も一緒に海へ連れてって！！！！」

「うおーーーーーーん。

おめェら好きだーーチキショ〜〜〜〜〜！！！！」
それを見ていたフランキーが泣いてる。

ガコン・・　「！」

「跳ね橋が下りるぞ！！」
ゴ　ゴ　ゴ　ゴ　ゴ
「あいつらうまくいったみてェだな。」
「ム・・・武者ぶるいが・・・・」ガタ　ガタ
そげキングあんた恐いだけね。
「早く下ろせ。」うず　うず
「悪そうな顔・・・・！！」

「行くぞ！！！！」　ド　ン！！
ボキ　ボキ

ゾロは今にも刀抜きそうだし、
ルフィ指鳴らしてるよ、やる気満々だな。
俺も頑張ろう！！

“宣戦布告？（後書き）

感想ください！！

“麦わら海賊団？VS“ CP9？開幕

司法の塔　入り口

「あそこに階段がある！！
早くロビンとこいくぞ！！」

「待て。」　「！！？」　「何だありゃ！！」

呼び止めたのは六式使いフクロウだった。

「チャパパパパ・・・！！
侵入されてしまったーー！
さっきの部屋へ行っても、
もうニコ・ロビンはいないぞー
ルッチが“正義の門？へ連れてったからな。」
「え！？」　「あ・・・あと長官もな。」

「今向かってるところだが行き方も教えないし、
おれ達「CP9」がそれをさせない。
お前達を抹殺する指令が下ってる！！
チャパパ。
お前達はおれ達を倒さなければ、
ニコ・ロビンを解放する事はできないのだ。
これを見ろ。」
フクロウは1つ鍵を取り出した。

「鍵！？」　「なんのだ。」

「ニコ・ロビンを捕らえている海楼石の手錠の鍵だ！」

「カイロウセキ？？」

「能力者の悪魔の力を無効にする石よ！

あんた達が海に落ちるのと同じ効力らしいわ。」

「それでロビンは今も大人しくしてるのか、

本当は強いのに！！くやしいだろうな！！」

「お前達が万が一ニコ・ロビンを救い出す事があっても、

海楼石はダイヤの様に硬いので、

その手錠は永遠にはずれる事はない。」

「！！？」

「それでも良ければ、

このままニコ・ロビンを助けに行けチャパパ。」

「じゃよこせ！！！」ドゴォン！！！

ルフィはフクロウを狙ってゴムゴムの銃（ピストル）を放つが剃でかわされた。

「・・・あいつもあの技使えるみてェだ。」

「慌てるなー・・！！

まだこの鍵が本物だとも言ってないぞ。」

「何だとォ！？」

「別の鍵かもしれないチャパパ・・・

この塔の中におれを入れて「ＣＰ９」は５人いるが、

それぞれ一つ鍵を持ってお前達を待っている。

おれ達はチャンスをあげているのだ。

じゃあな。」タン！ヒュッ！！

そう言い残すとフクロウはどこかへ消えた。

「〝ルッチ？〟ってのは、あのハト男の事か？」

「ああそうだ。」

「そいつとロビンちゃんが一緒にいるんだったら、
ルフィだけでも先に行かせよう。
ルフィ！お前はとにかくハト男をブッ飛ばせ！！
ルフィを除いておれ達は7人、
ーーここに5人いるらしい「CP9」から、
ロビンちゃんの手錠の鍵を5本手に入れ、
ルフィを追う！！！」

「ロビン君が門をくぐれば全て終わる。
何もかも時間との勝負だな。」

「負けは時間のロス。
全員死んでも勝て！！！」

「「「「「おう！！！」」」」」

ダダッ！！

司法の塔　内部

「うわっ！！何だこの階段、ズレてるぞっ！！」
「本当だ。」
「やっぱりさっきの衝撃は何かあったんだ！！
大丈夫か！？この建物！！」

俺は今チョッパーと行動している。
たしか原作でチョッパーはクマドリと戦い、
暴走して死にかけてた憶えがあるからだ。

「ギャアァァァ。」
「！」　「何だ？」
「！！えっ、ゾロ！！そげキング！！」
「あ！！チョッパーーー！！ツバサーーー！！！！」
そこには狼とキリンに追いかけられているゾロとそげキングがいた。

「何だ！？楽しそう！！お・・・おーーーい！！」
「アホォ！！！手錠に注目しやがれ！！！！」
「「２番」の手錠の鍵探してくれーっ！！！」　「！？」
よく見るとゾロとそげキングの腕が手錠でつながっていた。

「ハァハァ。」ど　ど　ど　ど　ど！！
「2番っ2番っハァ・・・！！
そうか鍵と手錠には番号があるのか！！」

「みたいだね、ったくあのバカ共！！
何してんだか・・・！！」

『ええ！？そんな事になってんのなら！！
おれがあいつらと戦うよ！！』

『ばかいえ相手は二人だ。
もしお前がやられたら、
手錠のままおれ達は何も出来ず殺されちまう。』
『頼む！！お前達がおれ達の希望だ！！』
『希望！？そんなの嬉しくねーぞ！！』デレー
『サンジ、ナミ、フランキー。
誰かが“2番の鍵？を手に入れたら、
すぐここへ届けてくれ！！！　』
『頼んだぞ！！！』

「一番早く鍵を手に入れそうなのは・・・
サンジかな。」

「たぶん、あいつ強いし・・・」

「サンジを探そう！頑張るぞ！！おれは“希望？だ！！」ど　ど
ど　ど　ど
！！

「頑張って！！」

「ツバサもだよ。」

「冗談冗談。」

「冗談言ってる場合かよ！！！」

“麦わら海賊団？VS“CP9？開幕（後書き）

もう投稿し始めてから1週間です。早いねー！！

ツバサVSクマドリ

「さて、サンジはどこかなっと。」

「ん、あれナミじゃないのか！？」

チョッパーの言う方向を見ると、
クマドリに捕まったナミがいた。

「本当だ。しかもピンチっぽいね。」

「助けに行かなきゃ！！」

「突き殺そうかァあァよよい！！
あァ絞め殺そうかァあァよいよい！！
」

「ウッ・・・！！」

「木枯し吹くこの今生でェ～エ！！
春の芽吹きを待つも叶わず大往生。
せめて一度真っ赤にいとしい花弁咲かせェ、
散らすがおいらの義理人情っ！！！
あの世に行ったらァ・・・
おいらの死んだァおっかさんに・・・
伝えてやっておくんなせェ・・・
おいら・・・おいらァ元気でェ～～・・・！！

殺ってるぜっ！！！さァ死ね、さァさァ
「春・吟・情」！！！」
「いやァ！！！」
トドメを刺そうととしていたその時。
“刻蹄？「桜（ロゼオ）」！！！」
「びょ！！！？」ガコン！！！
何者かがクマドリの前に飛び出した。
ドカァ・・・・ン！！！「ぼえいっ！！！」
チョッパーの“刻蹄？「桜」が決まり、
クマドリは地面にめり込んだ。

「ハァ・・・ハァ、ケホ！！ケホ！！！」
「ナミ！！！大丈夫か！！？」
「ハァ・・・ケホ・・・・・・！！
チョッパー・・・・・・！！
ありがとう助かった・・・」

「アレ何だ！？能力者か！？」

「わかんない！
あいつの髪タコみたいに動くから、
手も足も出せないの！！」
「それは「生命帰還」だよ！！
バイオフィールドバックって言うやつ。」
「ーーそれより今の内よチョッパー、ツバサ！！
早くここを離れましょう！！」ダッ！！
俺達は走り出した。
「何で！！？あいつ倒さなきゃ鍵が！！」
「これでしょ」「！！」
ナミを鍵を出して見せた。

「鍵だけは気づかれずスッたのににげられなくて！！
みんなの状況わかる？」
「なァそれ何番って書いてある！？」
「番号？　“３番？」
ガクーン「ダメか。」
「何なのこの番号。」ヒュルルルルルル
「！！？」
ドカァ・・・ン！！
「うわァ。」　「きゃ！！」　「っ！！」
「何か・・・落ちてきた！！」
「え！！？人形！！？」
「違う！！！サンジ！！？」
「何だ！？？この姿！！！」

落ちて来たのはツルツルになって、
体の凹凸の無くなったサンジだった。

「「ＣＰ９」にこんな事ができる“能力者？がいるんだ・・・！！
まさかサンジ君がやられるなんて・・・！！」

「・・・・・！！
ガフッ・・・！！ハァ・・・」
「サンジーっ！！」
「・・・す・・・・・すま“ねェ・・・・・・敗けた。
・・・鍵・・・奪え・・・ながった。」

「！」
ナミは上の階から見下ろしている人影に気づいた。
「ま・・・待ってろサンジ！！
すぐ応急処置するからな！！」

「サンジ君・・・本当に勝てなかつた・・・？
まともに戦ったの・・・・・・？
相手はあの女でしょ・・・あんた女に甘いもんね。」

「・・・！！　鍵の事は・・・すまなかった。」

「違うわよ！！そんな“騎士道？持ってる為に、
あんたの命まで取られちゃうって言ってんの！！！
こんな目にあってもまだ貫くの！？
死んだらどうすんの！？」

「・・・！！　別に・・・死にてェとは思わねェ。
・・・・・・ただ、
女は蹴ったらいかんもんだとたたき込まれて育った。
だから・・・・・・・
・・・たとえ死んでもおれは女は蹴らん・・・！！！！」

「おお・・・！！」ぞくぞくっ・・・！
「カッケェ・・・！！」
「え・・・今・・・「カッコいい」って。」
「やっぱカッコよくない。」
「ばかね・・・ばか！！」ガン！！
ナミがサンジを天候棒（クリマ・タクト）で叩いた。
「おい何すんだナミーっ！！！くらァ（怒）」

「逃げ出す事も“騎士道？に反するのなら、
・・・せめてそっちは捨てなさいよ！！
ムダに死ぬ事は話が別よ！！
あの女は私に任せて！！！

容赦しない。
ーそれとあんたの“騎士道？・・・少し見直したわ。」
「俺も。」
「！　え・・・今・・・「惚れ直した」って。」
「そうは言ってねェっ！！」ガン！

「私は、優しくしないわよ！！」
上の階にから見ていたカリファに向かい声をかける。
「私もよ、気が合いそうね・・・」

ナミが階段を上り始めた時、
「よよい！！待ァ～～～てェ～～！！
あ逃がしてェ！！！
あ逃がしてなァ～～る～～～も～～～のか～ァ！！！」
現れたのはクマドリだった。
「タコ男！！」
「ナミはあの女を！！
あいつはおれ達が何とかするよ！！」
「わかった！！」

「“刻蹄？・・・「十字架（クロス）」！！！」
ズドォン！！！　「よよゴォ！！！」

「チョッパー行くぞ！！！」

「おう！！」

「「生命帰還」“髪縛り？！！！」
ビュルルル！！

「危ね！！」あの髪面倒だな。
「「剃」」ヒュッ！！
チョッパーの方行ったな？
「どこだ？」「チョッパー！！上！！」「！？」
「「指銃（シガン）」「Q（キュー）」！！！」
「うお！！」ズボン！！
クマドリは手に持っている杖を、
ビリヤードの様に使い刺そうとしてきた。
「そろそろ本気出させて貰うとするか。「剃」！！！」ヒュッ！！
「「指銃（シガン）」「Q（キュー）」！！！」ビュッ！！
「「鉄塊（テッカイ）」！！！」
ガキン！！！
「！？」

「よよい！！六式を使うたァ～てめェ～～はァ～何者だァ～～？」

「憶えてねェか？
5年前お前らの殺しそこねた元仲間だよ。」

「よよい！！
てめェ～～もしやァ～～ウィンなァ～のかァ～～？
しかしあいつァ～～男だぜェ～～！！」

「今は分けあって女になっちまったんだ。
それより早くやろうぜ！！
“生命帰還？「紙絵武身（カミエブシン）」」
シュルルル
「「指銃（シガン）」「Q（キュー）」！！！」ビュッ！！！

「「紙絵(カミエ)」」ヒラリ

「鳥の腕力から放つ「嵐脚」・・・
「嵐手刀(ランシュトウ)」！！！」

「「鉄塊(テッカイ)」！！」
ガキン！！「ヨボォ！！」
鉄塊されるとダルいな、
でもちょっとは効いたか？
さあどんどん行くか。

ツバサVSクマドリ（後書き）

クマドリとても書きづらい。

“ためらいの橋？到着（前書き）

３５０００ＰＶ　６０００ユニーク突破です！！
読んで頂きありがとうございます！！

“ためらいの橋？到着

『チョッパー！！お前に頼みたい事がある！！』
『何だ！？』
『サンジに水をかけて来てくれ！！！
そうすればサンジは元に戻るハズだ！！』
『ホントか！！？』
『よよい！！勝負の最中に話しをするたァ～失礼千万！！
「指銃（シガン）」「Q（キュー）」！！』
ビュッ！！
『ちっ！！「鉄塊（テッカイ）」』
ガキン！！
『とにかく頼む！！お前らだけが希望なんだ！！！
サンジにも同じように伝えといてくれ！！！』
『分かった！！』ダッ！！

「水はどこにあるかな？給仕室かな。
急げ！！俺は“希望？なんだ！！がんばるぞ！！」

「「獅子指銃（ししシガン）」！！！」
指の形をした髪がツバサに迫る。
「くっ！！「剃（ソル）」！！」ヒュッ
ドドドッドドォン！！！

「そろそろ本当のスピード見せてやるか。
おいクマドリ！！普通の「剃（ソル）」の移動速度は時速９０ｋｍ前後。
だけど俺は・・・「剃（ソル）」」ビュッ！！
「消えた！？」
ヒュッ！！
ツバサはクマドリの後ろに現れた。
「能力との併用で時速１５０ｋｍ以上だ！！
「嵐爪銃（ランソウガン）」！！」
ズドォン！！「ぶェ！！！」

「悪いなやっぱり本当の速さ見せらんないわ。」
「！？」
「・・・・“速すぎ？るから。「剃（ソル）」！！」ビュッ！！
「「嵐爪銃（ランソウガン）」“乱（ミダレ）？！！！」
「！？」
ズドドドドォン！！！
クマドリは壁をつき抜けそのまま気絶した。

「悪ィ、俺急いでんだ。」

司法の塔　１階

ザッバァン！！

「え！？ツバサちゃんは、おれが“希望？だって？」

「うん！！そう伝えてくれだって。
多分ゾロ達がピンチだから、
助けてやって欲しいんだと思う。」

『サンジだけが最後の希望なんだ！！お願い！！！！』←妄想
「ムフフフ。」

「ダメだ、全然聞いてねェ。」

ためらいの橋　支柱内部

「“ＪＥＴバズーカ？！！！！」
ズドォン！！！！
それを喰らったルッチは吹っ飛んだ。

あーやってるやってる。

「フランキー！！！ロビンを頼むっ！！！！！」

「スーパー任せとけ！！！！！」

俺も手伝うか。「「剃（ソル）」！！」ビュッ！！

「フランキー！！俺も行く！！掴まれ！！」がしっ　バサッ　バサッ

「おう！！わかった！！って、
え！？お前どうやってあいつらの中通って来たんだ！？」
「俺も六式使いで剃が使えるからだよ。」
「じゃあ、お前もルッチとかの仲間だったのか？」
「まァ5年前の話だけどね。
それより急ごう！！」
バサッ　バサッ

「あ、あれ！！ロビンなんじゃない！！？」
「本当か！？」
ロビンは綱で結ばれ、
スパンダムに乱暴に引きずられている。
「あいつ後で絶対ぶん殴る。急ぐぞ！！」

ド　ウ　ン！！「ポカバ！！！」「！！！？」
いきなりロビンを引きずっていたスパンダムが吹き飛んだ。
「ハデバラぽげぴゃ！！！」
ボゴォ・・・ン！！！「長官殿！！！」
ボ　ボボ　ボォ　ン
「うわァ！！！」「ぎゃあ！！」

ロビンの周りにいた海兵達も、
正体不明の炎の球に吹き飛ばされていく。

「もしかしてウソップ！？」
「ウソップってあの鼻の長いヤツか？
たいしたもんじゃねェか！！」

その時ロビンが走り出した。
「そろそろ出番だ。落としていいよな？」
「おう！！スーパー任せろ！！」

「ニコ・ロビンが逃げます！！！」

「逃がすな！！！バカ共！！！
撃っていい！！殺さねェ程度に、撃ち殺せ！！！」
「えェ！！？」

「撃てェ！！！」ドドドドドン！！！
ガキキキン！！！
全ての銃弾が金属音と共にはね返された。

「んな！！！」「ええ！！？」
「何だ！！？コイツはァ～！！？」

ロビンの前に立っていたのは“改造人間（サイボーグ）？フランキーだった。

「・・・あなた。」
「丈夫なのよ、鉄だから」
シュタッ「間に合ってよかった。」
「ツバサさん！！」

「ひ！！」←ビビり過ぎてキモい。

『フランキー君、フランキー君。こちらそげキング。』
「ん？あん？この電伝虫はおめー・・・・」
『ナミから私が受け取った！
それよりその付近に、
小さな“赤い布の包み？が落ちているハズだ。』
「おお・・・あるぞ。」
どよ　どよ
『鍵が2本入ってる。
君のと合わせて鍵は全て揃うハズだ！！』
「鍵全部～～～～～！！？え　ええ　　え」←ホントにキモい
『確かに届けたぞ。』

“ためらいの橋？到着（後書き）

忙しくて遅くなってしまいました。
感想等があれば是非ください待ってます。

勝利！！（前書き）

４００００ＰＶ突破です！！

勝利！！

『少佐以下出陣不要、「大佐」及び「中佐」のみ。
精鋭２００名により、速やかに始末せよ。』

俺達はロビンの手錠を外すのに成功した。が、
まだルフィとルッチの決闘の勝負がついていないため、
脱出出来ずにいた。

『かかれ！！！ニコ・ロビンを奪還せよ！！！』
わあああああ！！！

「さーてとっやりますか！！「剃（ソル）」。」ビュッ！！

「気ィつけろ！！“能力者？もまざってるぞ！！！」
フランキーの殴りかかった相手の体が、
バラバラにわかれボール状になった。

「それは・・・
お互い様よ！！」ゴキ！！　ゴキ！！！
ロビンが関節技を決めていく。

「そうだな！！！「嵐脚（ランキャク）」“巨大斬（ビガーザン）？」
ブンッ！！！

ズトーォン！！！「うわあああ！！」
巨大な斬撃を放ち海兵達を吹き飛ばした。

「あの技は・・・・」

「はい、間違いないかと・・・」

「生きていたか・・・・・・“鷹爪のウィン？！！
まさか海賊になっているとは・・・！！！」

「一緒に帰るぞォ！！！ロビ～～～～～ン！！！！」

『ぜ・・・！！全艦へ報告！！！
「CP9」ロブ・ルッチ氏がたった今・・・！！！
海賊“麦わらのルフィ？に！！！
敗れましたァ！！！！』
「何だとォ！！？」

「やっとか遅ェよ。」

「・・・そんなバカな・・・！！
サイファーポール史上最強といわれる現在の「CP9」の、・・・
そのリーダー。
ロブ・ルッチ氏までもが海賊に敗れるなんて・・・！！！」

「ウ・・・ウゥ、
ル・・・ルフィが勝ったァーーー！！！」

「ヒヤヒヤさせやがって。」
「ついにやったか！！麦わらァ！！！」
「ルフィ・・・！！
全員すぐに脱出船へ！！！船を出すわよ！！！」
「やったー！！！ルフィ～～！！！」

『やったぜ麦わらさ～～～ん！！！
うお～～～！！！』
「！！？」
どこからか声がする。
「え？」
『バ・・・バカお前ら向こうまで聞こえちまうだろ！！』

「おい！！なんだこの声は！！！」

『いいんだ知らせてやるんだよ！！！』

「わかりません！！電伝虫を通してどこからか！！」

『アニキー！！！アニキーーー！！』
『やめろ！！
このまま逃げりゃおれ達は死んだ事になったのに！！』

「お前ら・・・・・・！！」

『おれ達ァ全員無事ですよー！！！
逃走手段もあるんでこっちは大丈夫！！
後で生きて会いましょう！！』
バスターコールの砲撃で死んだと思われていた、
ガレーラやフランキー一家は無事だったようだ。

「おめーらァ～～～！！！
バキャローおべーらの心配なんざするかァバガーー！！！」

「おい！！ルフィ！！
急いでこっちへ来いよ！！
逃げなきゃ助からねェんだ！！
ゴムゴムでこっちへ飛んで来い！！
後はおれが担いでやるから！！
周りは海と軍艦だらけだ！！
ここにいたら殺されちまうぞ！！！」

「・・・ハァ・・・・・・ダメだ・・・。
体がよ・・・！！ぜんぜん・・・動がねェ・・・！！」

「しょうがねェ俺が行く！！早く船を出せ！！」バサッ！！
「ツバサ！！」
「全員急いで船へ！！」

『撃て！！』
ボッカァァン！！

「え！！？うそっ！！脱出船が！！！」
せっかく奪った脱出船が海軍の大砲により沈んで行く。

「何てこった・・・！！！絶望的だ！！
あの船以外にここからの脱出手段はねェんだぞ！！！」

『撃て！！』
ドカァン！！ボコォン！！
『第二支柱へ追いつめろーーー！！』

「くそっ！！とうとう橋なんかなくなっちまった！！
支柱に追い込まれた！！」
「これ以上何も出来ねェぞーーーっ！！！」

「誰だ・・・誰なんだよこの声一体！！」

「下？下を見る？」

「やっぱり聞こえる！！何だ！？下って・・・」

「下を見ろって・・・！！」
「何言ってんの！？トナカイちゃん！！」

「助かるんだ・・・！！
助けに来てくれたんだ！！！
まだおれ達には・・・・・！！
仲間がいるじゃねェかァっ！！！」

「チョッパー下見た？」「見たァー！！！（感）」

「みんなっ！！飛び込むぞ！！！」

「海賊達が海に飛び込みます！！」
「バカめ！！海に飛び込んで助かる道はないぞ！！」

「「「「「「「「「メリー号に！！！乗り込め～～～！！！！！」」」」」」」」」

『迎えに来たよ！！』
一瞬そう聞こえた気がした。

「船です海賊旗を見るに“麦わらの一味？の船です！！！」

「メリーーー！！！メリー号が生きてた！！！」
「信じられねェ・・・この船はあの時海に・・・！！」
「一体誰が乗って来たの？」
「そんな話は後だ！！
指示をだせここを抜けるぞ！！」

「みんな！！」
ロビンがみんなに声をかける。

「ありがとう。」

「へへ！！」
「気にすんな！！ししし！！」

何隻もの軍艦の間をすり抜け砲弾をかわし逃げきった。

「このケンカ！！」

「おれ達の勝ちだァ！！！！」

うおおおおおおお「よっしゃーーァ！！！」

勝利！！（後書き）

わかる人はわかると思いますが、
“巨大斬（ビガーザン）？はＢｉｇｇｅｒ　ｔｈａｎです。
英語の勉強をしている最中に、
ふっと頭に浮かんだので使ってみました！！
読んで下さっている皆様に頼みがあります。
主人公の新しい技を考えてくれませんか？

全員が追加手配（前書き）

７０００ユニーク突破です！！

全員が追加手配

俺達が泊まっている仮設本社
特別海賊ルームにフランキーが訪ねてきた。

フランキーは何故か急に宝樹“アダム?について語りだした。
宝樹“アダム?は周りで何が起きようと、
ものともせず立ち続ける最強の巨大な樹ならしい。

「おれの夢は!!!
その「宝樹」でもう一度だけ!!!
どんな海でも乗り越えていく、
“夢の船?を造り上げる事なんだ!!!」

だからその樹を買う為に俺達の2億を盗んだらしい。

「「宝樹」は手に入れた!!
図面も、もうある。これからその船を造る!!
だから、完成したらお前ら、
おれの造ったその船に乗ってってくれねェか!!?」

「じゃ・・・
お前その船おれ達にくれるのか!?」
「そうだ、
おれの気に入った奴らに乗って貰えるんなら、
こんな幸せな事はねェ。
元金はおめェらから貰った様なもんだしな。」
「お前いい奴だなァ!!貰うぞ!!!
ありがとうフランキー〜〜〜!!!」

「うお〜〜次の島へ進めるぞーーーっ！！」

数日後

フランキー一家のスクエアシスターズが、
船の完成を知らせに来てくれた。

「よし！すぐ行こうぜ！！」
「うおおーー！！！！」

「麦〜〜わら〜〜さ〜〜〜〜・・・ん！！！」

「！？」

声のした方を見るとフランキー一家達がこちらに走ってくる。

「フランキー一家・・・！！」
「あんた達どうしたんだわいな？
息切らして・・・！！」

「ハァ・・・ハァ・・・実は・・・
無理聞いて貰おうと。
・・・手配書・・・！！見ましたか！？」
「手配書？」

「あんた・・・！！
とんでもねェ額ついてるぜ！！麦わらさん。
それに他のみんなも追加手配されちまってる！！」

「おれもか！？やった。」

「話すより・・・見てくれ！！」

ばさばさっ！

そう言うと持って来た手配書を広げて見せた。

「あんたら８人全員の首に賞金が！！！」

“麦わらのルフィ？　懸賞金３億ベリー

“海賊狩りのゾロ？　懸賞金１億２０００万ベリー

“鷹爪のツバサ？　懸賞金１億ベリー

“悪魔の子？ニコ・ロビン　懸賞金８０００万ベリー

“泥棒猫？ナミ　懸賞金１６００万ベリー

“わたあめ大好きチョッパー？【ペット】　懸賞金１００万ベリー

“狙撃の王様？そげキング　懸賞金３０００万ベリー

“黒足のサンジ？　懸賞金７７００万ベリー

「わっはっはっは！！

うはーーっ！！上がったー！！！」

「フン。」

「おれもこれで立派な賞金首だな！！」

チョッパーも暴走せずに戦ったので、

原作の５０ベリーより賞金が高くなってる。

「・・・ま・・・まァ、
心中お察しするというか、
・・・色々と言いてェ事はあるだろうが、その・・・
まーー待ってくれっ。」
ごそごそ
そう言うともう一枚、手配書を
出した。

「おれ達の頼みってのはこっちなんだ。
見てくれ。」

“鉄人（サイボーグ）？フランキー　懸賞金４４００万ベリー

「フランキー！！！」

「大変だわいな！！アニキが賞金首に。」

「麦わらさん、頼む！！！
無理矢理でもいい！！！
アニキを海へ連れ出してくれ！！！
あの人元々海賊の子なんだよ！！！！」

「当たり前だろ！！なぁルフィ。」

「あったりまえだ！！！」

数時間後

「お前らウソップの事はちゃんとハラを括ったな！？」
ゾロがみんなに向かって聞いた。
まだウソップは帰って来ていない。
「これが“筋？ってもんだ・・・」
「・・・わかった。」

「ダマされた・・・、
町の雑誌の記者だって言ってたのに、
かわいく撮れてるからそれはいいけど、
はぁ・・・とうとう私も賞金首か・・・」

「それにしてもすごいなツバサちゃん。」
「最初から1億ベリーだもんな！！ししし！！」

「たぶん元ＣＰ９ってのがバレたんだと思う。」

言ってなかったけど、
なんでサンジが落ち込んでいないかと言うと、
実は、大佐達との乱闘の時に、
写真撮ろうとしている奴を見つけて、
「剃（ソル）」で近寄って気づかれないように、
レンズのキャップを外しておいたからなんだよね。
あまりに原作のサンジが可哀想だったから。

「ナミさ～～ん、

おれの手配書見て惚れなおした〜〜？」
「ハイハイ。」
やっぱやめときゃよかった。
「忘れ物するなよーー！！！
船とフランキー貰って出航するぞ。」
「「「「「「おォーっ！！」」」」」」

海軍本部

「異例中の異例だな。
少数とはいえ・・・一味全員が賞金首とは・・・・
“総合賞金額（トータルバウンティー）？が７億を越えている。
しかもこの“鷹爪ツバサ？は、
実は元「ＣＰ９」のＮｏ．２“ウィン？だ。」

全員が追加手配（後書き）

ツバサの技案待ってます！！

“魔の三角地帯？（前書き）

遅くなりました。すいません！！

“魔の三角地帯？

「ツバサー！！今日女子3人で風呂入んない？」
「え！？あっその俺は・・「たまにはいいわね。」え！？」
「じゃあ決まり！！行きましょ。」
「えっ！？ちょっ！！」
「ツバサ！！早くしなさいよ！！」

ザバァーッ

あーあ結局入っちゃったよ恥ずかしー。
「ハァーやっぱこんな広い風呂は、
みんなで入んないと勿体ないわね。」
「ツバサさん何恥ずかしがっているの？」
「あ・・・いや、その・・・」
「もしかして見られるのが恥ずかしいの？」
「ちっ違っむしろ逆っ！！」
「え！？見られたいの？」
「そっちの逆じゃねーよ！！！
見るのが恥ずかしいっていう意味！！」

「なんで！？レズなの？」

「だから違ーう！！いいから話聞け！！
みんなにはまだ話してないけど、
実は俺、元男なんだよね・・・」

「またまた～。ツバサったらマジメに話なさいよ。」
「オカマって事？」

「大マジメだし、ロビン俺はオカマじゃねえぞ！！」

「そうよね、かわいいし体も女だし・・・」

「なんて説明したらいいのかな？
目が覚めたら女に変わってたていうか、
変えられていたっていうか。」

「そんな事あるの！！？」

「そういえば「ＣＰ９」はあなたに気付いていなかったわ。
それに悪魔の実の能力と考えればあり得なくもないわね。」

「確かに・・・
気付いてたら直ぐに殺しにくるわよね普通。」

「うん。ロビンの言った通りだよ。
ホルホルの実の“ホルモン人間？、
“カマバッカ王国女王？エンポリオ・イワンコフ。
俺はソイツに女に変えられた。
ソイツの女ホルモンを受けると心と体が女になる。」

「ツバサの男版ってどんなんかなァ・・・」
「きっとカッコいいでしょうね。」
「他人事だと思いやがって！！」
「フフ・・でも心も女になるなら何で男口調なのかしら・・・」
「たしかに！！」
「それは男の誇り（プライド）だよ。」
「女なのに？」
「うっせぇ！！」

「はー、いいお湯でした！」
「いいよなーナミは、俺達は足湯ぐらいしか入れねェのに・・・」
「あんたは飛べるんだからいいじゃない！！」
『おい！！海に何か浮いてるぞ。』
ジムにいたゾロが何やら発見したようだ。
「！　なんだなんだ、タル！？
見ろ！！“宝？って書いてあるぞ！！！」

よく見ると海神御宝前と書かれた旗のついた樽が流れてきた。

「もしかして！！
「宝船」の落とし物じゃねェか！？」
「お宝！？」

「残念、お酒と保存食よ。」

ナミが言うには「流し樽」といって、
航海の無事を祈って海の守護神にお供え物をするらしい。

「飲んだ後は空樽に、
新しいお供えを入れて流すのがならわしよ。」
「へー。」

「開けろ開けろ早く！」
「おい神様ー！！！おやつ貰うぞーー！！！」
「空島で“神？をぶっ飛ばしてきたのはどこのどいつだよ・・・」
「よし開いた。」ガポッ！
「わっ！！！」シュルルルル・・・
「何か飛んだ！！！」
パァン！！！「！？」
樽の蓋を開けたとたん中から何かが飛び出し赤く光った。

「何だ！！？」「赤い光・・・！？」
「・・・・・・！！何！？どういう事！？」

「“発光弾？よ。
・・・ただのイタズラならいいけど・・・

もしかして・・・
この船はこれから誰かに狙われるかも知れない。」
「まさか・・・そういう罠なのか！？
樽を開けた事でおれ達がここにいると、
今誰かに知らせちまったのか！？」

「みんな持ち場に！！南南東に逃げるわよ！！
5分後よ！！“大嵐（おおシケ）”が来る！！！」

「もしかして次の“編（エピソード）”に入るのか？」
「ツバサどうしたの！？」
「いや何でもない！！」

「はあ・・・越えた・・・・・・・」

「越えたはいいが・・・何だこの海。
まだ夜でもねェだろうに・・・・・・・
霧が深すぎて不気味な程暗いな。」

「・・・・・・もしかして・・・
・・・例の海域に踏み込んだって事かしら・・・
まだ心の準備が・・・！！」

「そうだ気ィ抜くなよ・・・
まさにこの海域はもう・・・あの有名な、
“魔の三角地帯（フロリアントライアングル）”」

“魔の三角地帯”は毎年１００隻以上の船が謎の消失を遂げ、

さらに死者を乗せた幽霊船(ゴーストシップ)がさ迷っているといわれているらしい。

「準備だ！！悪霊退散グッズで身をかためねば！！」

「ウソップ俺にもかしてくれーー！！！」

「ヨ　ホ　ホ　ホ　～・・・♪」ギギギ

「何だ・・・音楽・・・・・・？」

「・・・ヨ　ホ　ホ　ホ　ー・・・♪」

振り返った先には・・・

「出た～～～～～～～～！！！」

「幽霊船(ゴーストシップ)～～～～！！！」

“魔の三角地帯？（後書き）

ここから先ツバサは原作知識ありません。

“死んで骨だけ？ブルック登場（前書き）

９０００ユニーク６００００ＰＶ突破です！！！

“死んで骨だけ？ブルック登場

「ヨホホホホ！！！
ハイどうもみなさん！！ごきげんよう！！！
私(わたくし)この度この船でご厄介になる事になりました。
“死んで骨だけ？ブルックです！！！
どうぞよろしく！！！」

紅茶の入ったティーカップを持った、
アフロガイコツが自己紹介をした。

「「「「「ふざけんな！！！何だコイツは！！！」」」」」
「ヨホホホ　おやおや手厳シィーーー！！」

ルフィが宝探して来ると船に乗り込んでしまい、
宝ではなく代わりに生きた“ガイコツ？を連れて来てしまった。
オマケに仲間にするらしい。
コイツの事だ本当に仲間にしてしまうんだろう。

「ガイコツだーーーーっ！！！」
「ガイコツが喋って動いてアフロなわけがねェ！！！
これは夢だ、絶対夢だ！！！」

「おや美しいお嬢さん！！
パンツ、見せてもらってよろしいですか？」

「やめんかセクハラガイコツ！！！（怒）」

「おいルフィ！！！こいつは何だ！！」

「面白ェだろ、仲間にした。」
「したじゃねェよ、認めるか！！！」
「ヨホホホホ。ん？」
何かに気付いたらしく、こちらを見てきた。
「？」
・
・
・
ズズ・・・　紅茶をすすった。
「「何か言えよ！！！！」」ガビーン！！
「ヨホホホホ！！冗談です。
お嬢さん、パンツ見せて貰ってよろしいですか？」
「「やっぱ言わんでいいわ！！」」
「ヨホホホホ！！まあ　そう熱くならずに！！！
どうぞ船内へ！！夕食（ディナー）にしましょう！！！」
「「「「「「「てめェが決めんな！！！（怒）」」」」」」」

「私紳士ですので“食事を待つ?、
そんな何げない一時が好きで・・・
ディーーナ〜〜アッ♪ディーーナ〜〜アッ♪
イエーーカモン♪」
カンカン♪カカン♪
ナイフとフォークでコップを叩きディナーコールをしだした。
「うるせェよ!!黙って待ってろ!!!」

「料理長!!ドリンクは牛乳でお願いしますよ!!」

「ところでコロボックル。」

「あ、ブルックです私。
えーと・・・あ、お名前まだ・・・」

「おれはルフィだ。
ところでお前一体何なんだ?」

「どんだけ互いを知らねェんだお前ら!!!」

キッチンからサンジが出てきた。
「さァガイコツを追い出すのは後回しだ。
ひとまず食え!」

「んまほーー!!
おいブルックいっぱい食え、サンジのメシは最高だぞ!!」

「私、何だか・・・!!お腹より胸がいっぱいで・・・」

「お嬢さんのお肉少し大きいですね。
替えて貰ってもよろしいですか？」

「おかわりあるから自分の食えよ！！」

食後

「“ヨミヨミの実？・・・！？」
「やっぱり“悪魔の実？か・・・」

ブルックは喋るガイコツになった理由を話してくれた。

ブルックはヨミヨミの実の「復活人間」で、
二度の人生を約束されていた。
数十年前、
ブルックの入っていた海賊は同業者と戦い全滅。
その日、能力が発動したが霧が深くて自分の死体が見つからず、
見つけた時には死体は白骨化していた。

「じゃ、お前オバケじゃねェんだな！？つまり！！」

「ええ、私オバケ大嫌いですから！！

そんなものの姿見たら泣き叫びますよ私！！」

「あんた鏡見た事あるの？」
ナミが鏡を差し出してきた。

「ギャーーー！！やめて下さい鏡は！！」
「え！？おいちょっと待て！！
お前何で・・・・・・！！
鏡に映らねェんだ！！？」
「ほんとかー！？スゲーーーな！！！」
ブルックはウソップのとなりにいるハズなのに、
何故か鏡に映っていなかった。

「よく見りゃお前“影？もねェじゃねェか！！！」

ブルックの足元を見てみると、
足元から伸びているハズの影がなかった。

「うわー！！！本当だ！！！
お前は実は何者なんだーーー！！！」

・
・
・
ズズ・・・　ミルクをすすった。

「いや落ちつくとこかよ！！！」

「全てを一気に語るには・・・
私がこの海を漂った時間はあまりに長い年月・・・・・・！！！

私がガイコツである事と・・・
影がない事とは全く別のお話なのです。」

「・・・・・・」

「続く。」

「今話せよ！！！（怒）」

ブルックの話によると、ある男に“影？を奪われたらしい。
影がない者は直射日光を浴びると消滅し、
鏡や写真にも写れない体になるらしい。

「つまり私は光に拒まれる存在で！！仲間は全滅。
“死んで骨だけ？ブルックです。どうぞよろしく！！
ヨホホホホ！！」

「何で明るいんだよ！！
さんざんだな、お前の人生。」

「なのに“コツコツ？生きてました！！骨だけに！！！」
「「うるせェよ！！！」」

「ヨホホホホホホ！！ヨホホホホホホホホ！！」
「おいおいどうした大丈夫か？」

「今日はなんて素敵な日でしょう！！！
人に逢えた！！！」

「？」

「今日か明日か、
日の変わり目もわからないこの霧の深い暗い海で、
たった一人舵のきかない大きな船に、
ただ揺られてさ迷う事　数十年！！
私、本っっ当に淋しかったんですよ！！！
淋しくて怖くて・・・！！！死にたかった！！！
長生きはするものですね！！！人は“喜び？！！！
私にとってあなた達は“喜び？です！！！
ヨホホホ！！！」

「ダメだ！！俺！！」うるっ！！
コイツ可哀想過ぎる！！
「ツバサ・・・」

「私の為に泣いてくれるのですか？
私も涙さえ涸れていなければ、泣いて喜びたい所。」

「・・・・・・！！」

「あなたが私を仲間に誘ってくれましたね！！
本当に嬉しかったのです。どうもありがとう。
だけど本当は断らなければ！！」

「おい！！何でだよ！！」

「先程も話した様に私は“影？を奪われ、
太陽の下では生きていけない体！
今はこの魔の海の霧に守られているのです。
あなた方と一緒にこの海を出ても、

私の体が消滅するのも時間の問題。
私はここに残って“影?を取り返せる、
奇跡の日を待つ事にします!!
ヨホホホ。」

ズズン!!
「!?　わっ何の震動だ!?」

バン!!
ブルックが部屋を飛び出した。

「何て事!!
まさかこの船はもう「監視下」にあったのか!!?
見て下さい!!前方が門で閉ざされました。
今の震動はこれです。
これは門の裏側!!・・・という事は!!
船の後方を見て下さい!!!」

ブルックの言う通り後方を見ると、
不気味な城の立っている島があった。

「これは海をさ迷う“ゴースト島(アイランド)?・・・!!!
「スリラーバーク」!!!!」

“死んで骨だけ？ブルック登場（後書き）

ほぼ写しですいません。
ツバサの技名　募集してます。

相棒　“海星？（前書き）

いつの間にか１００００ユニーク突破です。
ありがとうございます！！

相棒 “海星？

俺達はスリラーバークに閉じ込められ、
ルフィの「冒険準備万端病」のおかげで、
上陸したい奴はすることになった。

で今、フランキーのソルジャードックシステムの、
６つの内の最後の１つ“チャンネル２？のお披露目をしている。
試しに乗り込んだのは「島に入ってはいけない病」の、
ナミ、ウソップ、チョッパーの３人。

「出動！！買い出し船っ！！」ガララララ・・・
「ミニメリー２号！！！
４人乗り蒸気機関「外輪船」だ！！！」
シャッターが開き、中から見馴れた船首の小舟が出てきた。
「メリーだメリーが小舟で蘇った～～～～！！！」
「こんな素敵なプレゼントが隠れてたなんて！！
ありがとうフランキー！！」

「最高の心遣いだな。」
「こんな買い出し船ならいくらでも買い出すぞおれは。」
「うほーかわれーーはやくかわれーー！！」

「待ておれ達はこれから実際に乗るんだ、
ひとまずあいつらに堪能させてやれ。」

「そういやァフランキーに頼みたい事があるんだ！！」

「何だ？武器でも造るのか？」

「ちょっとね。」

フランキーの兵器開発室

「これなんだけど・・・」
ポケットに入れていた袋を取り出し、
フランキーの前に入っていた中身を出した。

「宝石と手錠？これで何するんだ？」
袋から出したのは手錠３つと宝石

「それはダイヤモンドと海楼石の手錠だよ。
エニエス・ロビーで盗んで来たんだ。」

「なるほど能力者対抗用の武器か。」

「その通り、出来ればこんな感じで頼む。」
そう言って持ってきたイメージ図を見せる
「わかった！！スーパー任せろ！！」

「キャアアアアァ！！！」「！」
遠くから叫び声がする。
「もしかしてナミ達じゃ・・・
俺ちょっと見てくるからやっといて！！」

ダッ！！

甲板

「みんな！！どうしたの！！？」

「それが！！」

「島の方からウソップ達の叫び声が！！」

シュルルル・・・ドボォン！！「！？」

「勝手に錨(いかり)がっ！！！」

バン・・！！　「ん！？　！！？」

「・・・・・・！？

何だ、ハッチが急に開いた！？

・・・誰か触ったか！？」

「ん？」むに　にょーーーーーん「ん？」

急にルフィの顔が伸びた。

「おいルフィ！！てめェ何やってんだ、

こんな時にフザケやがって！！！」

「にっ！！ひがうんら（違うんだ）！！ひがうひがう（違う違う）

！！
おえあんおやっええええよ（おれなんもやってねえよ）！！」
「ガルル・・・」
「？　猛獣の声・・・！？」

スラッ！！　「ん！！？」
今度はゾロの刀が勝手に鞘から抜かれた。
そしてそのままルフィの方へ。
「え！？危ない！！」ドカッ！！「ぐへっ！！」
ザクッ！！！
「悪ィ！！刀が勝手に・・・！！！　？」
「変だね、俺達以外に誰かいるのかな？」
「・・・さっき、猛獣の唸り声を聞いたわ。」
「猛獣！？」
「ますますわからねェ・・・・・・！！」

数時間後

俺達の船は島の入口の巨大クモの
巣に捕まっていた。

「正面には計算されたとしか思えねェ位置で島の入口が誘ってる・・・
・
ゴースト達の手招きまで見えてきそうだ。」

「なーにをごちゃごちゃ言ってんだゾロ！！」
「ホラおめェも来い！！」

「行ってらっしゃーい！！」

「ツバサは来ないのか？
ここにいたってヒマなんだ。行くぞ！！
弁当わけてやるからよ　ししし！！」

「ゴメンやりたい事があるんだ！！
それに船番はいたほうがいいだろ？」

「そうだな！！肉とか盗まれたら大変だしな！！」

「忘れるところだった！！ホラよっ！！」ひょいっ
フランキーが何やら縦長の袋をこちらに投げてよこした。

ぱすっ！

「もしかしてもう出来たのか！？」

「あったりめェだ！！」

「何だ？それ。」

ルフィが気になって聞いてくる。

「ちょっとね、後で見せるよ！！

ありがとうフランキー！！」

「また何か造って欲しかったら言えよ！！」

さてと性能を見ますか！！

俺は袋から中身を取り出した。

フランキーに作って貰ったのは、刀とグローブだ。

そう、能力者に対抗するために刃などに海楼石をしこんだのだ。

フランキーは『もっとハデにミサイルとか仕込もうか？』

とか聞いて来たが、

『頑丈にだけしてくれ。』と言っといた。

刀は日本刀で、刃は乱刃。

刃文の部分が海楼石で出来ている。

グローブは関節以外全体的に海楼石が使われていて、
自然系（ロギア）の能力者も掴める。

「フランキーって何でも造れるんだな、
とにかくこれで自然系（ロギア）に触れる！！」

ヒラリ

「ん？手紙？」

『この刀の柄の頭にはライト機能をつけておいたぜ！！
名前は自由にしてくれ！！
ちなみにおれの考えたのは「スーパーフランキーチャンピオン丸」
だ！！』

「ライト機能？まあいいや。
名前かァ、どうしようかな。
フランキーと言えば星のマークだよな、
それと海楼石使ってるから・・・・・・星海。
いやこの刀の名前は“海星（かいせい）？
うん、いい！！“海星（かいせい）？にしよう！！
ん？もう1時過ぎてたのか。」
時計を見ると夜中の1時を過ぎていた。

「宝を探せ！！早くしろ！！」

あれ敵襲（おきゃくさん）かな？

相棒　“海星？（後書き）

ツバサに刀持たせる事にしました。
そうしないと対三大将の時不利なので・・・

黒幕

「早くしろ！！宝を探せ！！」

ピンクの髪の女がゾンビみたいな奴らに命令した。
そんじゃ武器試すか、「「剃(ソル)」」

「ヘイ、ペローナ様！！」

ズバッ！！「ぐあ！！」

急にゾンビ兵の一人が倒れ、
口から何か黒いものが出ていった。
その後も次々とゾンビ兵が倒れていった。

「どうした！！」

「急に兄弟達が！！ぐあ！！」ズバッ！！

「浄化されていきます！！！」

「何者だ！！もしや“鼻唄？か・・・・・・！？」

すっ・・・「残念、違うよ。」
「剃」での移動をやめ姿を現す。

「何者だ貴様は！！」

「聞きたいのはこっちの方だよ。」

「ん！？お前は1億首の“鷹爪のツバサ？！！
お前を仕留めてモリア様へのお土産にしよう！！
“ネガティブゴースト？！！」

ホロホロホロ・・・　ネガティブ　ネガティブ♪
変なゴーストがコチラに飛んで来る。

「ネガティブ？一応かわすか。「紙絵（カミエ）」」
ヒラリ

「「「なんだアイツは！！
ペローナ様の“ネガティブゴースト？をかわした！！」」」

「チッ、避けたか。次は外さねェ！！」

「「剃（ソル）」」ビュッ！！

「消えた！？」

「剃（ソル）」でペローナに近付き後ろから押さえる。
がしっ「うっ！！力が抜ける・・・」

「海楼石だよ。」

「「「ペローナ様ァ！！！
何だアイツは！！腐れやべェ！！！」」」

「何をしている！！早く助けろ！！」

「「「うおおお！！！」」」

ゾンビ達が襲いかかってくるので海星を構える。

ズバッ！！

「「「ぐあ！！」」」

斬られたゾンビの口からまた何か黒いものが出ていく。

「さてとペローナだっけ？全て吐いて貰おうか。」

「色々教えてくれてありがとね～～！！」バイバイ

「てめー覚えてろよ！！」

そう言いながらペローナは去って行った。

「敵は“王下七武海ゲッコーモリア？か・・・

元懸賞金3億2000万ベリーの謎の多い男。」

カゲカゲの実の能力者で相手の影を奪い従えさせれる。

でもこの“海星（かいせい）？ならさっきのゾンビの様に浄化できる！！

ガタガタッ！！

ん？今ダイニングの方で音がしたような・・・・・・・？

ダイニングに行って見るとそこには・・・

「ルフィにゾロ、サンジ！！！」

そこにはデコレートされた主力三人が椅子に並べられていた。

「三人共“影？が無くなってる・・・・・・！！

おいっ！！起きろっ！！！」ゆさゆさ

肩を揺するが全く起きない。

数十分後

「おーいルフィ～～～！！！

ゾロ～～！！サンジ～～！！」

甲板の方からチョッパーの声がする。

「ん？帰って来たか！！」ガチャ

「おかえりみんな～～！！ルフィ達はここだよ！！」

「ツバサ！！」

ダイニング

「なるほど、ルフィの影が巨人ゾンビに・・・
でナミが拐われたと・・・・・・」

「それより先に飯だ！！！」
ルフィが叫ぶ、三人共さっき叩き起こされた。
「ご飯なら死守しといたから大丈夫だよ。」

「ほんとかァ！！」
ルフィが冷蔵庫に走って行った。

「で、これからゲッコー・モリアぶっ飛ばしに行って、
ナミと影を取り戻してガイコツを仲間に入れると。
ＯＫ理解した。」

「さっさと乗り込むぞ。」
ゾロが言った

「ししししし！！よっしゃァ！！！
野郎共っ！！！反撃の準備をしろ！！！
スリラーバークを吹き飛ばすぞォーー！！！」

「「「ウオオオオ！！！」」」

島の入り口

「しかし、おれ達の影の入ったゾンビっての、
探し出すのは一苦労しそうだな。」

「・・・・・ゾンビなんて探さなくていいよ。
おれのゾンビは見てみたいけどな。」

「何言ってんだ、おれ達ゃこのままの体じゃ、
二度と太陽の下へ出られねェんだぞ。」
当たり前の様に言うルフィにゾロが言った。

「だってお前・・・
あの時ゾンビのおっさんが言ってたろ、
ゲッコー・モリアぶっ飛ばせばみんなの影が戻るって！」

「！？」

「・・・・・・た・・・確かに言ってた。
・・・・・・またコイツは核心を・・・」

ほんとだよ、たまに突く所がルフィのスゴい所だよ。

「とにかくまーおれは、
モリアをぶっ飛ばしに行くからよ！！

サンジ！お前、ナミの事頼むぞ。」
「当ったり前じゃァア！！！」ボォォオオ！！！
うわ熱い！！燃えてるよ。

「おれはガイコツの戦いが心配だ、そこへ行く！」

「そこおれも付き合うぜフランキー。
“伝説の侍？のゾンビってのがどれ程のもんか興味をそそる。
そういやツバサ、お前刀さしてるけど刀使えんのか？」

ゾロが海星に気づいた。

「少しね、俺も昔は世界一の剣豪目指してたんだ。
これ借りてくか？この間一本折れたろ。」

「いやいい、これから奪いに行くんでね。」にやり

「伝説の剣豪か・・・
じゃァ俺はお前の影でも倒しに行くよ。」

「ほう、おれを倒そうってのか？」

「まあね腕試ししたいし。
ルフィ！俺先行くよ！！雑魚狩って道開けとくから！！」
そう言って俺は獣人化した

「わかった！！」

「「剃（ソル）」！！」ビュッ！！

モリアのダンスホールに続く橋

ーースッ！！

目の前にはたくさんのゾンビ兵。

さてと狩りますか！！

「来たぞ！！捕まえろ！！」

「「「ウオオオオ！！」」」

一体のゾンビのかけ声で一斉にこちらへ襲いかかってくる。

そういえばウソップがゾンビは火に弱いっってたな。

「「嵐脚（ランキャク）」“火車切（かしゃぎり）？！！」ボォウン！！

炎を纏った斬撃がゾンビ達を襲う。

「「「ギャァアアア！！！」」」

「うお！！炎だ！！腐れやべーー！！！」

ホントだ超効いてる。

人化　シュルル

「「指銃(シガン)」“連塩弾(れんえんだん)？！！！」

ビュビュビュビュビュビュ！！！

俺は指銃の速度でゾンビの口に、
ウソップの作った塩玉(ソルトボール)を押し込んだ。
海星に斬られた時と同じ様に、
ゾンビ達の口から黒いものが出ていく。

「あれが影か・・・」

「何だ！！あいつ腐れやべー！！」

どどどどどどど　「！？ルフィ！！」

見るとルフィが走って来ていた。
その後ろにはロビン、ウソップ、サンジ、チョッパーもいた。

「ハァ　追いついた。
お前のおかげでだいぶ楽に来れた。
ありがとな！！」

ヒューン

「！？」

ボコォン！！

「何だ！？うわっ崩れる！！」

急に地面が崩れだした。
俺は獣人型（紙絵武身）になりロビンを抱え逃げた。
「ハァ・・・危なかった。」
おれはロビンをおろした。
橋が半分崩れていた。
「何か巨大なものが橋の上に落ちてきたみたいね。
何が落ちてきたのかしら？」
「そんな事よりウソップとサンジ落ちてったけど大丈夫かな。」
「置いてくのか！！？」
心配そうにチョッパーが聞いた。
「おう！！大丈夫だあいつらは！！」
「そうだな！！急ごう！！」ダダッ！！

黒幕（後書き）

ふれんどりーふぁいやーさんの技案使わせて頂きました。
これからも募集続けますので気軽に感想に書いてください。

キャラクター設定（前書き）

明けまして有り難うございます！！（震災もあったので一応）
１２０００ユニーク、８８００００ＰＶ突破！！
前のキャラクター紹介で説明しなかった容姿などです。
まだ未使用の技もあるのでネタバレ注意。

キャラクター設定

ツバサ
異名“鷹爪のツバサ？
懸賞金１億ベリー
元「ＣＰ９（シーピーナイン）」

容姿
身長１７２ｃｍ
体重？ｋｇ（想像で）
スタイル
果実はナミ達よりは小さい（果実が何かは察しろ）
ウエストはナミ達の中で一番細い。
服装
前　ぶかぶかのフードのついた上着に長ズボン。
現在　ナミのおさがり（前の服は全て捨てられた）
髪型はマダム・シャーリーと同じで、
目がミホークと同じ感じ。

戦い方
悪魔の実「トリトリの実」モデル“鷹（ホーク）？
能力と剃の併用によりＣＰ９では最速だった。
「生命帰還（せいめいきかん）」「紙絵武身（カミエブシン）」
通常よりパワーは落ちるがスピードが増す。
六式全般（特に「剃（ソル）」と「嵐脚（ランキャク）」）
「嵐脚（ランキャク）」“巨大斬（ビガーザン）？
自分を中心に円を描く様に放つ斬撃。

“刀羅斬（とうらざん）
縦に打ち上げる様に放つ斬撃。
“火車切（かしゃぎり）？
炎を纏った斬撃。（読者案）
“飛刀擲（ナイフェッジ）？
無数の斬撃を放つ。（読者案）
“龍尾（りゅうび）？
龍の様にしなる斬撃を放つ。（読者案）
「嵐手刀（ランシュトウ）」嵐脚の手刀版。
「嵐爪銃（ランソウガン）」爆風を起こす指銃。
「天切剃刀（テンキカミソリ）」トリトリ、剃、月歩、生命帰還の併用による最速移動。
（読者案）

武器
“海星（かいせい）？　フランキーの造った海楼石で出来ている日本刀。
“海星（かいせい）？“刀羅斬（とうらざん）　？
嵐脚のより威力が高い。
居合“閃（せん）？
光が走るように見える。

キャラクター設定（後書き）

（読者案）は募集した技案の中から選んだものです。
技案の募集はやめないのでどんどん書き込んでください。

ツバサＶＳジゴロウ（前書き）

１３０００ユニーク、９１０００ＰＶ突破！！！
キャラクター設定を改正しました。
（少し付け足しただけですので気になる方はお読みください）

ツバサVSジゴロウ

「フォス　フォス　フォス！！！
一人取り逃がしちまったがどうだ！？
仲間達の力で取り抑えられる気分は！！」

俺達はモリアのいるダンスホールへ続く部屋についた。
しかしそこにはホッグバッグが待ち構えていて、
ロビンとチョッパーはサンジとゾロの影の入ったゾンビ、
犬ッペとジゴロウに捕まってしまった。
俺はと言うと気配を消しチャンスを伺っている。
チョッパーには逃げる際に伝えといた。

「フォス　フォス！！
さァシンドリーちゃん、こいつらにトドメを刺せ！！」

「はい」

「・・・・・・ここまで悪党だと、
気持ちいいくらいだホグバック！！」

「・・・・・・ん～！？」

「実際にすごい数の人達の命を救ったお前を、
医者として本当に尊敬してた。
ゾンビの研究だってそうだ。
「死」は突然やってくるから・・・
“死んだ人？にも“残された人達？にも、
言い損ねた言葉がたくさんある筈だ。

何年もなんて言わねェ、たった数分でもいい・・・・！！
もう一度死者を呼び起こす手段があるのなら・・・
たとえそれが「邪道の医学」と石を投げられても、
それで救われる人の気持ちはデカい。
だから“死者の蘇生”を研究してるというお前の言葉に、
・・・やっぱりスゴイ医者だと思ったんだ。」

「フォス　フォス・・・！！バーカな・・・
他人の為になぜそこまで・・・・！！
昔の話もそうさ・・・！！
おれは、ただ天才だっただけ！！
迷惑なモンだ面倒臭ェ！！！
そこいらのバカ医者共に救えねェ命も、
おれなら救えちまう。
こんな天才の悩みがてめェにわかるか！！？
とんだ思い違いだぜバカトナカイ！！！
このおれに医者のあり方なんぞ説こうってのか！！？」

あーイライラする、そろそろ相手も油断してるしいいかな？

俺はロビンの咲かせた耳にＧＯサインを出した。
「（いつでもいいぞ！！）」
「（分かったわ。
チョッパーいいわよ）」
ロビンがチョッパーに能力で伝える。
「（わかった。）
そんなつもりは毛頭ねェ。
おれはもうお前を医者だとも思ってねェんだ！！！
物を言えない死体を使って・・・
お前は怪物を生み出してるだけだ！！！」

「たいした医術も持たねェで“命?を語るんじゃねェよ海賊鹿！！！
殺せシンドリーちゃん！！！
おめェら二人は没人形（マリオ）にする、喜べＤｒ．（ドクター）チョッパー！！
死んだ暁には尊敬するこの俺の助手にしてやるってんだぜ！！！」

「「角皿刀（かくざらとう）」一枚二枚三枚っ！！！」ビュ　ビュ　ビュ
シンドリーがチョッパーに向かい角皿を投げる。
「うおおお！！！」ドドッ！！
「！」
ズババッ！！
ガシィッ！！「！！？」
チョッパーは体が切られるのも構わずシンドリーを抑えようとする。
「止まれ！！」

「この・・・」バリン　バリィン！！
シンドリーは持っていた角皿をチョッパーに叩きつけた。
しかしチョッパーは手を離さなかった。
「チョッパー！！」

「かわいそうに・・・！！もう死んでるのに！！
残された家族がこれを知ったらどんな気持ちだ。」

「手を放せ・・・！！」ドス！！
掴んでいるチョッパーにシンドリーが蹴りを入れる。

「一緒に生まれ育った“心?はもう死んでるのに、
体だけは人の言いなり動かされるって一体何だ！！？」

「フォス　フォス！！てめェの目を疑うのか！？

認めろ！！これが人の永遠の夢！！“死者の蘇生？だ！！人間は蘇る！！！」

「ハァ・・・ハァ・・・

動いたらそれでいいのか、人間ならもっと自由だ！！！

お前が一番人間扱いしてないんじゃないか！！！！！」

「！！」

「ロビン！！コイツに塩を！！」「！」

ロビンが能力を使いシンドリーの口に塩を入れようとする。

「ペンギン！！ジゴロウ！！シンドリーに手を貸せ！！！

邪魔者を消せ！！！」

よし出番だ。

「「剃（ソル）」“海星（かいせい）？居合」ビュッ！！

剃で犬ッペに近づく。

「！？」

「“閃（せん）？！！」ヒュン

すれ違い様に犬ッペを斬る。

斬られた犬ッペは浄化された。

「な！！？

逃げたのかと思ったら貴様！！隠れていたのか！！！」

「その通りだよ。」

「許さん！！てめェも“没人形（マリオ）？にしてやる！！殺れジゴロウ！！！」

ジゴロウが刀を構える。

「来るか・・・」

「三刀流（さんとうりゅう）“百八？」

「“海星（かいせい）？」チャキ

ツバサも刀を構えた。

「“煩悩鳳（ポンドほう）？！！！」ドゥン！！

ジゴロウが三本の斬撃を放つ。

「“刀羅斬（とうらざん）？！！！」ズザァ！！

ツバサは縦に斬撃を打ち上げ相殺した。

打ち上げた斬撃は天井に穴を開けた。

ボゴォォン！！！

「すごい力、流石はゾロだな。（手がジンジンする・・・）

だけど負けるワケには行かない！！

「嵐脚（ランキャク）」“龍尾（りゅうび）？！！！」シュッ！！

龍が飛ぶの様にしなる斬撃を放つ。

「“刀狼流（とうろうながし）し？！！！」「！？」

ジゴロウは斬撃を受け流し迫って来た。
「くっ！！「剃(ソル)」」
剃を使い一旦距離を取る。
「“鬼(おに)？」ダッ！！
「チッ！！「嵐脚(ランキャク)」、
“飛刀擲(ナイフエッジ)？！！！」シュ　シュ　シュ　シュ！！！
迫るジゴロウに向けいくつもの斬撃を放つ。
だがジゴロウは全て受けきり突っ込んでくる。
「“斬(ぎり)り？！！！」ズバン！！
ジゴロウはそのまま刀を振るうが、
しかしそこにはツバサはいなかった。
「どこに行った！？」
「ここだよ！！」「！？」
頭上から声がする。
「喰らえ！！「嵐脚(ランキャク)」、
“火車切(かしゃぎり)？！！！」ボゥン！！
ジゴロウは避けれずまともに喰らい辺りに煙が舞う。
決まったか？
しかし煙の中には人影が立っていた。
「何！？」

「”焼鬼(やきおに)？」ダッ！！
「くっ！！避けきれない・・・！！」
「“斬(ぎり)り？！！！」ズバン！！「がはァっ！！！」
ガクン
ツバサは横腹を斬られ片膝をつく。
「「ツバサ！！！」」
チョッパーとロビンが駆け寄って来る。
「ハァ・・・ハァ・・・強ェ・・・
相手がゾンビで良かった・・・
（くそっ今の俺は体が弱過ぎる・・・鍛えないと・・・）」
ジゴロウは燃えているため浄化されてしまった。
もし相手が本物だったら確実に負け殺されていただろう。
ツバサは意識を手放した。
「くそっ！！」ダッ！！
ホッグバックは逃げ出した。
「あっ！！まてコノヤロッ！！」
チョッパーが追いかけようとする。
ドゴゴゴォン！！「え！！？」
いきなり壁と床が崩れた。
壁を突き破って来たのは通常の巨人の二倍のサイズの“魔神？オーズだった。
「ル・・・ルフィのゾンビ！！！」

「床が崩れる！！チョッパーこっちへ！！」

ピョン　たたんっ！！「危なかった！！（汗）」

「・・・・・これがルフィ・・・！？」

「ツバサを安全な場所へ運ぼう！！」

「ええ。」

ツバサVSジゴロウ（後書き）

影とは言えゾロが女に負けてしまうのは可愛そうかなァ？
と、思ったのでこう言う感じに・・・
またふれんどりーふぁいやーさんの技案使わして頂きました。
ありがとうございます！！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1436z/

ONE PIECEの世界に転生

2012年1月3日02時50分発行